

令和六年度筑波大学附属図書館特別展

# 忠孝一本

江戸時代のモラリティ



令和6年度筑波大学附属図書館特別展

# 忠孝一本

－江戸時代のモラリティー－

会期：令和6年10月29日（火）～11月22日（金）

会場：筑波大学附属図書館（中央図書館貴重書展示室）

主催：筑波大学附属図書館／筑波大学芸術系／筑波大学人文社会系

#### 凡 例

1. 本書は令和6年度筑波大学附属図書館特別展 「忠孝一本 – 江戸時代のモラリティ –」 (会期：令和6年10月29日(火) ～ 11月22日(金))の図録である。
2. 本図録に掲載されている資料は、特に記載のない限り筑波大学附属図書館が所蔵する。
3. 本書の図版番号は、展示資料の番号と一致するが、展示の順序は必ずしも一致しない。
4. 掲載資料の表題等の書誌情報や解題等の漢字表記は、原則として通行の字体に改めた。
5. 本書の解説は、谷口孝介(筑波大学名誉教授)、井川義次(人文社会系教授)、水野裕史(芸術系准教授)、金鍾伯(元筑波大学人文社会系研究員/成均館大学校東洋哲学文化研究所研究員)が執筆し、編集および校正については特別展ワーキンググループが行った。
6. 執筆者の署名については、文末に(姓のみ)で表示している。

# 目 次

---

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 目次.....                    | 1  |
| 附属図書館長ご挨拶.....             | 2  |
| 芸術系長ご挨拶.....               | 3  |
| 人文社会系長ご挨拶.....             | 3  |
| はじめに 東アジアのモラルティ.....       | 4  |
| 第1部 帝王学－『貞観政要』と『帝鑑図説』..... | 8  |
| 第2部 『孝経』と東アジアの孝子伝.....     | 16 |
| 第3部 地方の孝子伝.....            | 23 |
| 第4部 江戸時代の教育 藩校と寺子屋.....    | 30 |
| 参考文献一覧.....                | 36 |
| 掲載資料一覧.....                | 37 |

# 附属図書館長ご挨拶

---

筑波大学附属図書館特別展へのご来場、心より歓迎申し上げます。

筑波大学附属図書館では平成7年度の中央図書館新館竣工時に貴重書展示室が設置されて以降、学内各組織の協力を得つつ、本学開学以来所蔵する貴重な資料を広く公開する展示事業を行ってきました。今年で30年目を迎えます。

貴重書展示室では、期間を設けて特別展や企画展を行うほか、年間を通じて「日本の出版文化」をテーマに、部分的な展示換えを行いながら常設展示をしていました。

昨年度は創基151年筑波大学開学50周年のタイミングで、この常設展示の刷新を図ることも踏まえ、古典籍へのアプローチという観点で令和5年度附属図書館企画展「古典籍のインターフェース」を開催しました。「本のかたち」、「本の構成」、「写した本・刷った本」、「本を分類する」という主題に対応した資料の特徴を解説する内容は、企画展終了後にも常設展示として引き継がれています。今日まで連綿と受け継がれた書物の成り立ちや、奥行きを理解できる常設展示は、授業や自習にもお使いいただける内容と自負しております。皆さま、ぜひお気軽にお立ち寄りください。

今年度は芸術系、人文社会系と共催で、特別展「忠孝一本 ―江戸時代のモラルティー」を開催します。

「忠」とは君主に対する忠誠を、「孝」とは親に対する孝行を意味する儒教の考え方です。江戸時代には、これらは同義と見做され、君主に対する忠誠と親に対する孝行の双方を大切にすることが、社会全体の安定に役立っていました。しかし、第二次世界大戦後、伝統的な家制度が否定されるようになると、「忠」の考え方は薄れていきました。それに対して、「孝」の精神は時代とともに変化はしているものの、現在も息づいています。

今回企画する展覧会は、昔の人間関係を振り返りながら、現代の社会をあらためて見つめ直す試みでもあります。前近代の「忠孝」を無条件に肯定するものではありませんが、そこには現代に失われた大切なものがあるかもしれません。古代中国を端緒とし、日本を含めた東アジアやヨーロッパに広がったこれらの概念を展示資料で解説します。

この展覧会を通じて、今の人間関係を見直すきっかけになれば幸いです。

令和6年10月

附属図書館長 西尾チヅル

## 芸術系長ご挨拶

---

このたび、附属図書館と芸術系、人文社会系の共催により、特別展「忠孝一本－江戸時代のモラリティー」を開催いたします。本展覧会は、江戸時代の人々の生活や価値観を紹介し、その文化に息づいていた道德観を再評価することを目指しております。

江戸時代は日本の歴史の中でも安定期であり、その時代に培われた文化や社会システムは現代にも多大な影響を与えています。その一つが、当時の人々の生活に根付いていた道德観です。道德とは、単なる規範やルールではなく、他者との調和や共生を重んじる心の在り方を指します。展覧会では、江戸時代の庶民から武士まで、様々な階層の人々がそれぞれの立場で道德を実践していた具体例を紹介します。

現代社会では、江戸時代の道德観の全てを肯定することはできません。しかし、私たちが学べることは多いのではないのでしょうか。例えば、人間関係の在り方や、個人の責任と社会との調和など、現代の課題に対するヒントが得られるかもしれません。

最後に、本特別展の開催にあたりご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。また、ご来場の皆様がこの展示を通じて、江戸の道德に触れ、新たな発見を得ていただければ幸いです。

令和6年10月

芸術系長 田中佐代子

## 人文社会系長ご挨拶

---

このたび筑波大学附属図書館と芸術系、人文社会系共催で特別展「忠孝一本－江戸時代のモラリティー」を開催します。

筑波大学の起源は明治5年、江戸幕府最高学府湯島聖堂内に設立された東京高等師範学校に遡り創基152年の歴史があります。中国に起こった儒教は、長きにわたり東アジア文化圏、さらには日本人の知的骨幹となり、ひいては理性の時代の欧米世界にも影響を与えました。本学の本全徳雄元教授と堀池信夫名誉教授のご研究がその事実を証明しています。

本展では、儒学者の著作や忠孝を題材とした文献・挿画などを展示します。これを通じて江戸時代の人々が儒教をどのように生活に取り入れ、精神形成し、社会秩序を形成していったのかが理解できます。また、企画されている特別講演会では、研究者や専門家が儒教の現代的意義について講演し、展示内容について学術的な議論を展開します。

AIやIT技術が注目される現代にあって、私たちは歴史の教訓に学びながら、未来へと歩みを進めることが大切ではないのでしょうか。本展が皆様にとって江戸時代の人生観・世界観を深く理解し、現代社会の在り方を再考するきっかけとなることを期待しています。

令和6年10月

人文社会系長 白山利信

# はじめに 東アジアのモラリティ

毒親。親ガチャ。「毒親」という言葉は、1998年から用いられ始めた俗語であり、子どもを支配したり害を及ぼしたりする親を指す。一方の「親ガチャ」は、2015年頃からインターネット上で広まり、子どもは親を選べないという現実を、当時流行していたスマホゲームの「ガチャ」に擬えたスラングである。現代では、軽々しく「親孝行」を肯定することが難しくなっている。そのような親孝行の背景には、「儒教」がある。

儒教には「三綱五常」という思想がある。「三綱」は君臣、父子、夫婦の間の道徳（忠孝）を示し、「五常」は「仁義礼智信」の五つの徳目を指す。儒教では、これらの徳を実践することが理想とされ、日本や韓国、ベトナムなど東アジア全域に広まった。

親孝行の基盤となった「忠」と「孝」について考えてみよう。「忠」は君臣関係を、「孝」は親子関係の在り方を示す儒教的な概念であり、東アジア全体で普遍的な価値観として受け入れられてきた。江戸時代の日本では、『弘道館記述義』（資料3）に見るように、これらは「一本」、すなわち同義とされていた。主君に対する忠誠と親に対する孝行は同じ価値を持ち、両立可能であると考えられていたのである。この考えは、江戸時代において社会の安定を図るシステムとして重要な役割を果たしていた。しかし、第二次世界大戦後、国家主義的な家制度の否定により、この概念は薄れていったとされる。

それでも、現代では新聞社や一部の自治体が親孝行や友愛の顕彰を行っており、「孝」の精神は今も生き続けている。儒教的な道徳観は依然として人々の生活や文化に影響を与え、家族の絆や社会の調和を重視する傾向が残っていることは確かである。しかし、個人主義の台頭や西洋の価値観の影響により、伝統的な道徳観が変化しつつあるのも事実であろう。今後の東アジア社会において、伝統的な道徳観を尊重しつつ、現代社会に適応した新たな倫理観を模索することが重要な課題となる。（水野）

## 1『<sup>ひょうだいじょうげん ほちゅうもうぎゅう</sup>標題徐狀元補注蒙求』 10巻10冊 京：仁左衛門 寛永15(1638)年刊

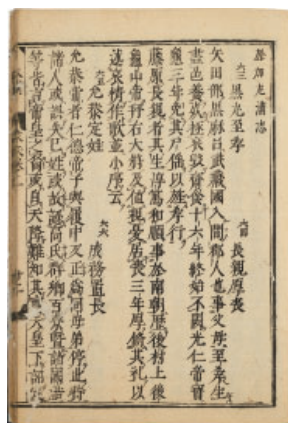
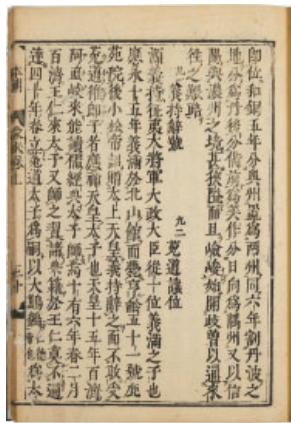
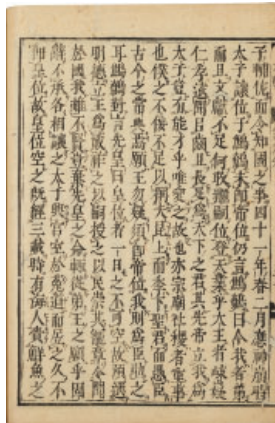


『蒙求』は中国の児童用の教科書。唐<sup>りかん</sup>李瀚<sup>りかん</sup>撰。上代から南北朝までの古人の有名な言行を題材として、記憶しやすいように4字句の標題で表し、「王戎簡要、裴楷清通」のごとく、類似の故事を一対にしている。書名は『易経』蒙卦の「童蒙我に求む」に基づく。初学者のための教科書として流行し、宋の徐子光が標題の内容を補注で説明した。日本では平安時代前期以来初学者の暗唱教材となり、大永3(1523)年、享祿2(1529)年に、儒者<sup>きよはらのふかた</sup>清原宣賢による徐補注に基づく講説の聞書をまとめたものが本書である。古活字本、さらに寛永15年整版本として刊行された。口頭表現で解釈し、漢字片仮名交じり文で書き下したものの。巻下「郭巨将坑<sup>かくきしょうこう</sup> 董永自売<sup>とうえいじばい</sup>」は、ともによく知られた漢代の孝子譚である。（谷口）

## 12『本朝蒙求』 3巻6冊

菅亨編輯；辻質校訂

京都：奥村太右衛門 貞享3(1686)年跋

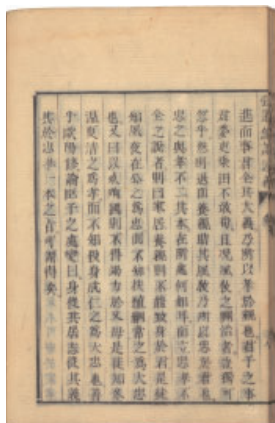


中国の『蒙求』に倣って、日本の神話時代から戦国時代までの人物故事を4字の標題400条にまとめ、諸書よりその基づく典拠(本文)を記したもの。著者は江戸時代前期京都の儒者。字は仲徹<sup>あざな ちゆうてつ</sup>。延宝7(1679)年自序。貞享3年跋。標題は『蒙求』と同様、「常立葦牙 武尊草薙」のように類似の故事を対句とし、偶数句末に韻字を置き、8句ごとに換韻する。巻上63・64「黒丸至孝 長親厚喪」は奈良時代の庶人と南北朝時代の貴族の孝子譚。それぞれ『続日本紀』と『新葉和歌集』とに拠る。同91・92「義持辞号 菟道讓位」は長上に対する謙讓の徳を説く話を対する。それぞれ『東寺執行日記』と『日本書紀』とに拠る。(谷口)

## 13『弘道館記述義』 2冊

藤田彪述

慶応2(1866)年刊



ふじたとうこ とくがわりあき  
藤田東湖(1806-1855)が徳川斉昭(1800-1860)撰「弘道館記」を解説した書。上下2巻。斉昭の内命を受け、江戸で謹慎中の東湖が、弘化4(1847)年に再稿本を完成し、豊田天功(1805-1864)の校閲を受けている。本書の内容は「弘道者何、人能弘道也」に始まる館記の本文を、「臣彪(東湖の名)謹案」という形で、一節ごとに解釈したもので、漢文で書かれた簡潔な文章には、東湖の歴史観や倫理観が遺憾なく発揮されている。この書は会沢正志斎『新論』と並んで水戸学の聖典とされ、慶応2年に木活字本(上下2冊)が刊行されたのははじめ板本も多く、明治以来はその注釈本も少なくない。館記本文「忠孝無二」について解説した箇所では、「忠孝両全せざるの説」(忠孝を両立させることはできない考え方)に対して、<sup>おようしゅう</sup>歐陽脩を援用して、「忠孝一本の旨」つまり忠と孝とは根本において一であることを説いている。(谷口)

## 祇園祭の孝子たち

祇園祭は京都の市中で7月ひと月を掛けて行われる壮大な祭礼である。中心となる地は八坂神社（祇園社）と京都の中心地いわゆる山鉾町とである。ひと月の間、各所でさまざまな行事が催行されるが、なかでも17日前祭、24日後祭の2日間の山鉾巡行は祭の華で、現在前祭では鉾9基、山14基が、後祭では鉾1基、山10基が山鉾町内を巡行する。壮麗な山鉾が祇園囃子に乗って揺れながらゆっくりと進むさまは、18世紀の数年間まさに現在綾傘鉾を出す綾小路通室町西入善長寺町の堀景山宅に遊学していた若き本居宣長が『在京日記』に記したように、心の踊躍を押さえかねるものである。各山鉾はそれを出す町の趣向により山飾りがしつらえられる。起源は明確ではないが、14世紀ころの記録に「作山」の語が見え、15世紀応仁の乱のころには現在の姿が現れだしたと考えられている。16、17世紀に盛行した「洛中図」で四条界隈の繁華を表すさいには、かならずと言ってよいほど山鉾巡行のさまが描かれており、現在目前にする山鉾がすでに登場していることが知られる。応仁の乱後、明応9(1500)年再興後の記録によると、ほぼ現在と同様の数の山鉾が巡行していたことが分かる。中日の古典などに取材したさまざまな趣向の山飾りがあるなかで、孝子を題材とした郭巨山(図1)と孟宗山(図2)とが戦国時代から現在まで巡行を続けている。記録や史料を見ても孝子を題材とした山飾りは他に見えず、孝子のなかでもこのふたりがいかに人気があったかが分かる。18世紀の浄瑠璃『本朝廿四孝』3段目段切は、「唐土の廿四孝を目のあたり。孟宗竹の筍は。雪と消え行く胸のうち。氷の上の魚を取るそれは王祥。これは他生の縁と縁。黄金の釜より逢ひ難き。その子宝を切離す弟が慈悲の胸欲と。兄が不孝の孝行は我が日の本に一人の勇士。今に。名高き山本氏。武田の家の礎と事跡を。世々に残しける」と閉じられる。長尾武田両家に分かれて仕官することとなる、弟慈悲蔵（じつは直江山城守）と兄横蔵（山本勘助）との確執を、二十四孝の孟宗、王祥、郭巨を引き合いに出して、巧みな文飾で語っている。ここでも孝子の代表として引き合いに出されるのが、孟宗と郭巨とであった。

漢の郭巨のことは「孝子伝」、『蒙求』（資料1）、『今昔物語集』巻9、『全相二十四孝詩選』など多くの書物に見える。『蒙求』では「郭巨将坑 董永自売」と同じく孝子の董永と対されている。ここでは日本で広く読まれた御伽草子『二十四孝』をもとにして紹介しておく。

郭巨は河内の出身である。家は貧しく母を養っていた。そこに子供ができて3才になった。郭巨の母は孫を慈しみ自分の食事を分け与えた。それを見かねて郭巨は妻に次のように言った。「ただでさえわずかな食事なのに孫に分け与えることでさらに食べる分が少なくなる。子供は再び生まれるだろうが、母はふたりとはいわない。この子を埋めて母をきちんと養おう」と。妻はもちろん悲しかったが、夫の提案に従って子供を連れて埋めに行った。郭巨が泣きながら少し穴を掘ったところ、黄金の釜を掘り出した。その釜には「天、孝子郭巨に賜う、官奪うことを得ず、民取ることを得ず」と書かれてあった。その黄金の釜のお蔭で財を得て子供を埋めることもなく、いよいよ母に孝行を尽くした。(図3)

諸書ともに大同小異の内容である。ただ郭巨のこととそれに対する妻の反応において、登場人物の心情描写の差を認めることができる。ショッキングな内容であるが、この極限状態のなかでの真誠の心が天に通じたことを示す。

三国呉の孟宗についても郭巨同様、「孝子伝」、『蒙求』、『今昔物語集』巻9、『全相二十四孝詩選』などに収載されている。ただ『蒙求』では、「文伯羞鼈 孟宗寄鮓」として出ており、賢母が息子をたしなめる話柄である。徐子光注では補足的に後半で晋の張方賢撰『楚国先賢伝』から当該話を引

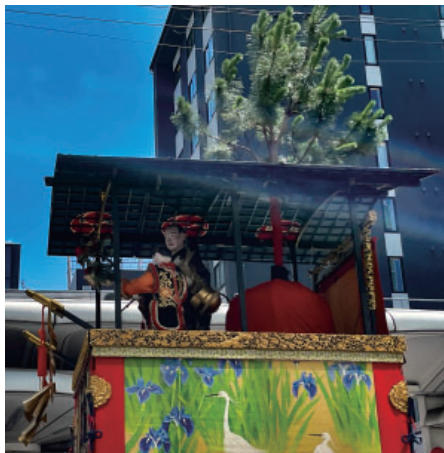
いている。ここでも御伽草子『二十四孝』によって紹介しておく。

孟宗は幼いときに父が死に、母を養っていた。母は年老いて病がちとなったが筍を好み食した。冬にも筍を欲しがったので、孟宗は竹林に行って探したが雪が深く到底見つからなかった。天に向かって一心に慈悲を請うて祈り、竹に寄り掛かって悲しんだところ、突然地面が裂けて多くの筍が生いであつた。これを取って帰り、汁物にして母に与えると、病氣も癒えてその後も長生きしたという。

(図4)

孟宗の伝が養老賦役令「孝子・順孫」条の「精誠通感」の注として『令集解』に引かれていることは、陽明文庫本『孝子伝』に「孝の神霊を動かしこの瑞<sup>ずい</sup>を感じしむと謂うべきなり」と本話の主題を提示していることに呼応している。

祇園祭の山鉾にふたりの孝子はいても、忠義の臣は見られない。これも京都の町衆の心意気の表れであろうか。  
(谷口)



(図1)郭巨山(2023.7.17撮影)



(図2)孟宗山(2023.7.17撮影)



(図3)『古板二十四孝』郭巨  
筑波大学附属図書館蔵



(図4)『古板二十四孝』孟宗  
筑波大学附属図書館蔵

# 第1部 帝王学 – 『貞観政要』と『帝鑑図説』

『貞観政要』は、唐代の太宗(李世民)(598-649)が魏徵(580-643)や房玄齡(578-643)、杜如晦(585-630)ら重臣と交わした政治論議を記録した書である。全10巻40篇にわたり、太宗の治世「貞観」の政治の神髄を示す。内容は、臣下たちとの問答を通じて、平和で安定した統治を実現する要因を解説するものである。太宗は臣下の忠告を真摯に受け入れ、つねに最善の君主であろうと努力した。太宗は自らを律し、臣下の直言を喜んで受け入れ、質素儉約を奨励し、仁義を重んじた。彼は、法の尊厳を守り、仁義をもって政治を行うことで、非常に平和で安定した時代を実現したと評価される。『貞観政要』の編纂は、太宗の死後40-50年後に行われた。呉兢(670-749)が中宗や玄宗に上進し、貞観の治世を手本とすべく編纂したものである。

こうした政治姿勢は後世の帝王学の手本とされ、中国のみならず朝鮮や、琉球(現在の沖縄県)、ベトナム、越南その他、東南アジア諸国やモンゴルの元王朝、西夏等においても出版・翻訳されるなど周辺諸国にも多大な影響を与えた。日本でも平安時代の伝来以来、北条氏や徳川氏などの政治家たちに愛読された。後世、帝王学の教科書として広く読まれた本書は、1300年以上にわたり、君主の統治の手本とされてきた。

一方、『帝鑑図説』は、明朝第十四代皇帝である万暦帝(1563-1620)のために作られた帝王学の教科書である。全117話に挿絵が付され、本文は簡潔で、幼い帝のために当時の口語が多く用いられている。これを通じて万暦帝が理想的帝王となることを切望していた。本書は初版発行直後から多くの海賊版が流布し、現代中国でも広く読まれている。万暦年間、張居正(1525-1582)が政治の中心となり、逼迫した財政状況を10年足らずで大幅な黒字に転じ、国力を増大したことはよく知られている。『帝鑑図説』は、10歳で即位した万暦帝に対する帝王学の書として構想された。しかし、万暦帝一人に対する教育という実用的な面から考えると、一冊の写本があれば十分である。それをすぐに出版して広めようとした背景には、万暦帝を帝王として育てるという理想と政治的な意味合いが込められていたと考えられる。

日本で刊行された早い例には秀頼版があり、豊臣秀頼が慶長11(1606)年に明版をもとに作らせたものとされている。挿絵部分は整版で、文字部分は木活字を用いた古活字版であり、徳川家康もその読者として本書を愛読したという。

また注目すべきは16世紀この方、キリスト教布教に従事していたイエズス会宣教師が張居正の解説を抄訳し、また木版画を銅版画化してフランス革命前夜の1788年にパリで刊行し好評を博したということも指摘したい。

(井川)

#### 4 『貞観政要』 10巻10冊

(唐)呉兢著；(元)戈直集論

京都：忠田吉兵衛 元和9(1623)年刊



唐の太宗の言行録であり、呉兢が編纂した。帝王学の教科書とされ、全10巻40篇から成る。太宗の自身を律し、臣下の直言を受け入れる姿勢が述べられる。展示箇所には部下は心底自分を理解してくれる上司であってこそ全身全霊を尽くす、「士は己を知る者の為に死す」という司馬遷『史記』「刺客列伝」の予讓の言に感じ入ったことが語られている。本書は、帝王学の指南書として、また東洋の政治と文化を知る上での必読書として、広く読まれてきた。(井川)

#### 5 『貞観政要諺解』 10巻5冊

林道春著

荒川宗長 寛文9(1669)年刊



江戸時代に文教行政を担った林羅山(道春)(1583-1657)が編纂した教科書である。徳川家康の学問奨励政策の一環として刊行され、唐の太宗の言行録『貞観政要』を和訳したものである。本書は、漢文を崩し、漢字に仮名を付し、語句の説明を挟む形式で、武士の必読書とされた。新将軍家綱の手引きとなるよう期待されたものであり、政権維持の現実的課題に応える内容を持ち、江戸時代の教育と政治において重要な役割を果たした。(井川)

## 6『帝鑑図説』 12巻12冊

洛陽〔京〕：八尾助左衛門 慶安3(1650)年刊



明代の張居正と呂調陽が著した皇帝の治政に関する故事・史評の書である。堯から宋の哲宗までの君主の治政を、善の法とすべき81事、悪の戒めとすべき36事に分類し、挿絵を付して幼帝万曆帝に解説したものである。日本では豊臣秀頼が和刻本を刊行し、徳川家康も愛読している。本書は江戸時代慶安3年出版の完全な和訳本であり、これを通じてその内容もより一層日本に広まっていった。展示箇所は、『帝鑑図説』の冒頭、伝説の聖王堯が有能な人材を採用し国を治めた「任賢図治」の部分である。（井川）

## 7『帝鑑図説』 6巻6冊

(明)張居正；(明)呂調陽奉勅撰

江戸：昌平坂学問所 安政5(1858)年刊



安政5年版『帝鑑図説』は、徳川幕府の官板として刊行された。漢文に訓点を全面に付した和刻本である。昌平坂学問所は、江戸幕府の教育機関であり、儒教漢学の振興に努め、幕府直轄の学問所として多くの書籍を収集していた。『帝鑑図説』もその蔵書に関わり、教育資料として利用された。儒者らは『帝鑑図説』を講読し、政治や教育の実践に活用した。これは幕府の教育政策の一環として、若い将軍慶福(家茂)の育成にも寄与した。展示箇所は、堯が、人々の忌憚のない政策提言を求めた「諫鼓謗木」に対応している。（井川）

## 8 『帝鑑図』 (個人蔵) 1幅(109.4×54.2cm)

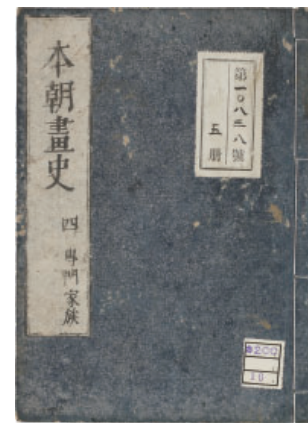
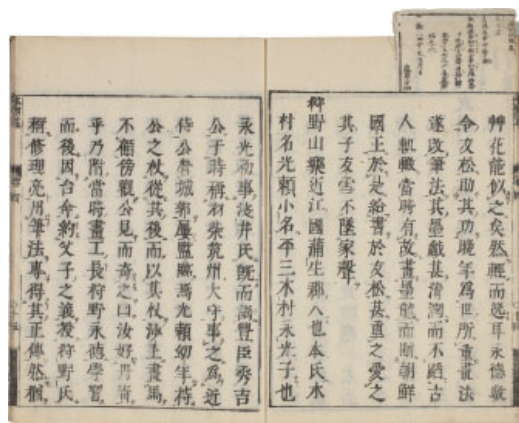
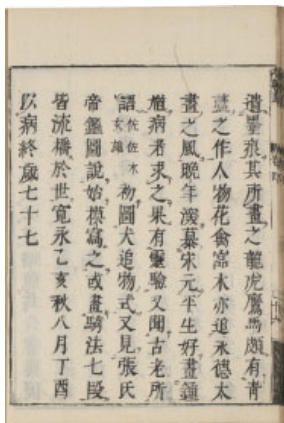


帝鑑図とは、『帝鑑図説』の挿絵が、屏風などの大画面に転用された画題を指す。『帝鑑図説』には、明代の万暦版、日本で刊行された慶長版などがあり、それぞれ帝王の冠など、細かな描写が異なっていることが判明している。帝鑑図は、その中でも、慶長版を参考にしたものが多い。本図は、谷文晁(1763-1840)の印が附された帝鑑図。場面は、『帝鑑図説』善行12話の「丹書受戒」である。周王朝の初祖である武王は、尚父(太公望)より、丹書という巻物に道理が記されていると教えられ、帝の座から降り、儀礼で定められた南面ではなく、東面して受け取った。慶長版『帝鑑図説』では、武王は旒と呼ばれる玉飾りがついた冕冠を被る。本図では、冕冠に烏紗帽が組み合わさり、本来あり得ない冠が創出されている。(水野)

## 9 『本朝画史』 5巻5冊

狩野永納撰

京：丸屋源兵衛；吉野屋惣兵衛 元禄6(1693)年刊



狩野山雪(1589-1651)の子、永納(1631-1697)が亡父の草稿を整理して出版した画人伝。儒学者の林鷺峰(1618-1680)が序文を寄せている。巻4には、狩野家の絵師に関する詳述がある。特に重要な記述は、永納の祖父にあたる山楽の項目である。ここに「又見張氏帝鑑図説始摸写之」と書かれている。山楽(1559-1635)が初めて帝鑑図を描いたと解釈でき、帝鑑図の成立を考える上で重要な記述であろう。実際に、最も古い帝鑑図は、東京国立博物館に所蔵される山楽筆「帝鑑図屏風」であり、この記述を裏付ける。また、慶長版『帝鑑図説』は、「秀頼版」とも呼ばれ、豊臣秀頼の命によって記された。山楽は、豊臣家に仕えた絵師であり、この慶長版『帝鑑図説』の挿絵にも関わった可能性がある。(水野)

## 10『後素集』 3巻2冊

狩野一溪著

藤木弥祖五郎写 文化10(1813)年



狩野派の絵師である狩野一溪<sup>かのういつけい</sup>(1599-1662)によって編まれた画論。中世から近世初期における画題が、「忠孝」や「聖賢」、「帝王」などの項目にまとめられている。それぞれ、主題について論じられており、近世初期における画題に対する認識を読み取ることができる。「忠孝」には、「二十四孝」、「聖賢」には、「欽器<sup>き</sup>」などの儒教に関連する説話があげられる。「帝王」には、『帝鑑図説』と同じ画題が列記されているものの、『帝鑑図説』の内容が単純化され、記される。『後素集』の編纂にあたり、簡易的な画論を作ろうとした意図を感じ取ることができる。(水野)

## 11『新刊聖蹟図』 1冊

(明)張楷輯；(明)何廷瑞補；(日本)河井徳久校正  
元禄11(1698)年跋



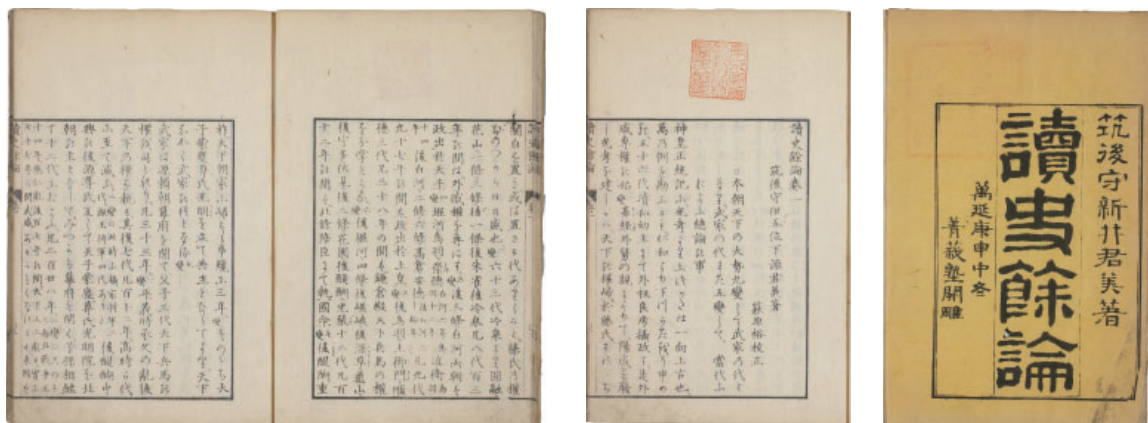
儒教の祖である孔子の生涯や功績を広く流布するために制作された図譜。孔子の思想や教えを視覚的に表現することで、理解しやすくしている。例えば、「仁」「礼」「義」などの儒教の核心的な概念を描写する場面が見られる。聖蹟図の多くは、明清の中国、李氏朝鮮、近世の日本で出版された。日本では、中世末に舶載したと考えられており、島津忠良<sup>ただよし</sup>(1492-1568)が屏風絵を制作させたことで知られる(現存せず。模本が、個人と加世田郷土資料館に所蔵されている)。展示箇所は、孔子が魯の国の桓公廟を訪ねた際、欽器とよばれる器に目をとめて、弟子に命じて水を注がせた話。器に満杯の水を入れた時には傾いて中の水がこぼれ、空にしても傾き、適度に入ると傾かなかったという。中庸の精神である、いわば「過ぎたるは猶及ばざるが如し」を説いた逸話である。(水野)

ぞくほんちようじんかん  
12『続本朝人鑑』 2巻2冊  
林鷺峰撰  
延宝2(1674)年写



延宝2(1674)年に林鷺峰が広島藩主浅野綱晟(1637-1673)の求めに応じて、『本朝人鑑』(寛文2<1662>年)を増補したもの。ただし鷺峰自序によると、完成を前に綱晟は没し、後継ぎの綱長が16歳の若年であったため、伯父にあたる三次藩主浅野長治の取り持ちで遺志を継いで完成させたという。原書は「仁厚」「忠義」「英雄」「敏捷」「貞節」「雑品」の6章38条であったが、本書において新たに「孝行」「礼讓」「教誨」「廉直」「度量」「剛勇」「秀才」の7つの徳目を増補し、全体で上下2巻114条としている。出版はされなかったようで、写本のみ伝わる。鷺峰は書生の草稿に手を入れ、各条末に「林子曰」として論評を記している。「仁厚」章では仁政を敷いた天皇・執政の徳を記す。後三条天皇親政で「宣旨升」が考案され民政が安定したこと、高倉天皇が園丁の風流心を感じたことが評価されている。(谷口)

とくし よろん  
13『読史余論』 12巻12冊  
源君美(新井白石)著; 萩原裕校正  
江戸: 和泉屋金右衛門; 山城屋佐兵衛 万延元(1860)年刊



江戸時代中頃の儒学者であり、将軍徳川家宣と家継にも仕えた新井白石(1657-1725)による歴史書。摂関政治から豊臣秀吉までの政治史を、実証的な視点で分析している。特に、天皇制や徳川幕府の正当性を論じ、日本の国体について考察する点に特徴がある。単に事実を記述するだけでなく、各時代の政治の評価や改善方策を指摘しており、林家による歴史書とは編纂方針が異なる。本書は、正徳2(1712)年、将軍家宣へ講じた草稿を門弟である土肥霞洲(1693-1757)が写し、さらに白石の次男である宣卿(1699-1723)らが転写し、享保8(1723)年に完成した。18世紀後半には、教科書のように広く読まれるようになった。(水野)

## ヨーロッパにおける『帝鑑図説』

フランス革命は世界史における重要な変革をもたらしたが、その背景にはアジアの哲学・思想が影響を与えた可能性がある。ここでは、明の宰相張居正の著作『帝鑑図説』と、それをフランス語訳し銅版画を付したエルマンの『中国帝王の記憶すべき事蹟』(Isidore-Stanislas HELMAN, *Faits mémorables des empereurs de la Chine, tirés des annales chinoises*, Paris, l'auteur et M. Ponce, 1788.)を取り上げる。

フランス革命は旧体制(アンシャン・レژیーム)を打倒し、理性と徳に基づく市民社会の建設を目指した画期的な出来事であった。この革命的思想は、古代ギリシャからルネサンス、名誉革命、アメリカ独立戦争など西洋の歴史的過程を経て醸成されたものであり、人間の理性は平等であり、それを発展させることが社会の進歩につながるという啓蒙主義の思想が重要な役割を果たした。これらの思想は西洋にとどまらず、世界中に広がり、現代に至るまで影響を及ぼしている。しかし、すべての世界変革の運動が西洋に起因するものであろうか？アジアの哲学・思想は西洋に何も影響を与えてこなかったのか？

理性の時代から啓蒙主義時代にかけて、ヨーロッパは異世界の人間理性の普遍性や平等、理性・徳行に基づく人間能力の発揮、民衆教育や社会の合理的組織化について情報を大量に受け入れた。その中には、中国の哲学情報も含まれていた。宋学の解説を経た「四書」「五経」など儒教經典の翻訳や中国哲学紹介文が多数伝来したのである。これらの経書の翻訳は、ライプニッツ、クリスチャン・ヴォルフ、ヘルダー、ヘーゲル、ヴォルテール、ディドロなどのヨーロッパ思想家たちに一定の影響を与えた。このような中で、儒教的価値観が反映した歴史的な事蹟の解説と挿画を付した張居正の『帝鑑図説』がヨーロッパに紹介された。

張居正は、明代の政治家であり、改革者として知られる。彼の著作『帝鑑図説』は、皇帝の徳行と政治の理想を説くものであり、儒教的価値観に基づいている。本書は、皇帝の行動規範を示すとともに、歴史的な事例を通じてその教訓を伝えることを目的としていた。『帝鑑図説』は、宋学の影響を受けた儒教的な教訓書であり、天理に応じた人間の崇高さと学習による人間性向上、社会の発展、万物との共存を説いている。

エルマンによる『帝鑑図説』のフランス語訳『中国帝王の記憶すべき事蹟』は、1788年に公刊された。この訳本には、銅版画が付されており、視覚的にも訴求力が高かった。フランス革命前夜にこの訳本が流入し、多くの人々に読まれたことは、革命運動に対する影響を考察する上で重要である。『帝鑑図説』の内容は、儒教的価値観に基づくものでありながら、理性と徳行を重視する点で啓蒙主義と共通する部分が多い。このため、『中国帝王の記憶すべき事蹟』がフランス革命に与えた影響は無視できない。

フランス革命の前夜、フランス人カトリック宣教師アミオ(Jean Joseph-Marie Amiot)は儒教に傾倒し、『孔子伝』を著し、フランスに紹介した。ついで、張居正が著した『帝鑑図説』の書物の木版画をヨーロッパの絵画技法で銅版画に仕立て直し、パリで公刊させたのである。

『中国帝王の記憶すべき事蹟』は、標題ページ、献辞、24の挿画、24の仏語解説文からなり、片面印刷されている。挿画は、イエズス会の画家アティレが描いた素描をもとに、コシヤンの指導のもとで制作された。

この書物の出版には、中国皇室とフランス王室、そしてベルタンのような政治家が関わっていた。このことは、両国の文化交流の歴史において注目すべき事実である。しかし、『中国帝王の記憶すべき事蹟』の仏文解説の翻訳者は現在のところ不明である。アミオなどのイエズス会宣教師が張居正

の思想に共感して書いた可能性が高いが、今後の研究課題である。仏文解説には、張居正の中国史観を尊重しつつも、ヨーロッパの混乱と比較し、中国を模範とした改革の必要性を訴える意図が見られる。

ヨーロッパ人は『帝鑑図説』をどのように受け止めたのか。中国を代表する名君・暴君の事蹟を表す事例に関する銅版画とその解説の要約をつぎに4点示したい。(井川)



(図1) 聖王禹の事蹟「下車泣罪」

紀元前2201年、禹帝は3年間の旅で犯罪者と出会い、その罪に涙を流した。彼は自身の徳の不足が犯罪者の多さに繋がっていると悟り、民が君主の徳を見習う重要性を認識した。



(図2) 暴君桀の事蹟「脯林酒池」

桀帝は邪悪な妣己を娶り、贅沢と残虐行為で治世を汚した。ワインで満たした運河で宮廷人が宴を開き、浪費と暴政で民衆の反乱を招き、王位を追われた。



(図3) 聖王成湯の事蹟「桑林禱雨」

紀元前1766年、成湯は暴君を倒し商王朝を創始。7年間の干ばつと飢饉に対し、進んで自ら犠牲となり祈りによって雨をもたらし豊かさを回復させた。



(図4) 暴君始皇帝の事蹟「坑儒焚書」

秦の始皇帝は国防のため万里の長城を築いたが、書物を焼き、学者を迫害した。彼は文字が反乱を広めると主張し、専制政治を行ったのだ。ジュネーブの哲学者(ジャン=ジャック・ルソー)も同様の見解をもっていたと説く。

## 第2部 『孝経』と東アジアの孝子伝

アジアにおける「孝」の概念は、中国本土で各時代に変遷し、各民族の受容の仕方も異なる。中国での「孝」は当初、血縁者の父母への敬愛を示すものであったが、後に社会的な長上への誠実さ「忠」と関連づけられた。しかし、『孟子』に見られるように、中国においては従来、忠は孝に優先されるものとは見なされなかった。この点について、多くの日本人は誤解している。「孝」の概念を体系化した最初の書物は『孝経』である。

『孝経』は、秦の始皇帝の焚書の際、孔子の子孫が邸の壁に埋めたものが前漢代に発見されたと伝えられている。そこでは「身体髪膚、これを父母に受く。敢て毀傷せざるは、孝の始めなり」との孝の意義づけが行われた。ただし、親に対する孝は単なる服従ではなく、親の言行に不適切な点があるときには諫める義務があることも説いている。この点も日本で理解されていない。

『孝経』で孝は、時間的には祖先-個人-子孫の生命の連鎖と、空間的には社会的共生関係が孕み込まれ、究極的には宇宙の万物生成の法則性と不可分に直結しているとまで見なされた。こうした独特な孝の解釈は、唐の玄宗皇帝注や朱子注に見られ、主に士大夫(官僚)の共通認識となってきた。

日本には奈良時代に『孝経』が伝来し、古い形態を持つと見られる古文『孝経』が日本に伝存していた。この古文『孝経』は、江戸時代に清朝中国へ里帰りしたことでも有名である。他方、一般庶民にとって「孝」は、祖先を同じくする宗族、共同体をつなぐ倫理として重視され、特に子の親に対する愛と義務に重点が置かれ、やや片務的と表象される傾きも生じた。

こうした関係性が美談として描かれたものとして、『二十四孝』や『三綱行実図』(資料16)等の図解入りのベストセラーのシリーズがあり、朝鮮・ベトナムや東南アジア諸国、さらには琉球・日本等アジア文化圏にも広く流布し、また各国の価値観に応じて孝理解に独自の変様が起った。日本における詳細な流布の実情については、本特別展図録を参照していただきたい。

他方、注目すべき史実として、18世紀にイエズス会士フラソワ・ノエルによってラテン語、マルシャル・シボによってフランス語、イギリス人宣教師ジェームズ・レッグによって英訳された。これらの翻訳を通じて「孝」の概念は、神を前提としない世界の安定・平和に貢献しうる思想として紹介され、初期啓蒙主義のリーダー、クリスチャン・ヴォルフやフランス百科全書派の指導者たちに高く評価された史実がある。ここからも地域、時代によって孝ないし忠、あるいはその他の儒教的価値観が多様な形で解釈・受容されたことが分かるのである。(井川)

こぶんこうきょう  
14『古文孝経』 1冊  
葉室頼業写 寛文9(1669)年



孔子が曾子に説いた孝道が書かれている。曾子門流の著。『論語』と並んで、儒教の基本図書として重視された。「古文」とは秦代以前に使用された書体の文字を言い、漢代以降の今文=隷書と対する。『古文孝経』には孔安国伝が存する。日本においても中国同様『論語』とならび古代律令官人の必須の教科となっていた。孔安国伝は中国においては唐末五代の間に忘逸したが、日本においては清原、中原両明経博士家に伝承されて、後世まで盛行した。本書は書写奥書によると寛文9年に、葉室頼業(1615-1675)が写し、明経博士清原家の嫡流である船橋経賢(1640-1708)が加点したもの。「士章第五」では士の孝道を説いている。孝は愛・敬の2要素からなり、親に孝を尽くすことが君に忠を尽くすことになると説く。(谷口)

こうきょうこくじかい  
15『孝経国字解』 3巻1冊  
勝田祐義編  
大坂：丹波屋半兵衛 明和4(1767)年刊



『孝経』原文を、章には分かつた一句ごとに区切り、逐語的に漢字片仮名交じりの日本語による解説を付けている。享保3(1718)年刊の『孝経安知抄』の改題本。編者勝田祐義については伝未詳であるが、他に『早引和玉篇大成』(享保10<1725>年)、『金言童子教』(享保14<1729>年)の編者として名を残す。巻頭に「誦経威儀」(明『孝経大全』甲集所収)を掲げ、それについても日本語による解説を付けている。人倫道徳的な教訓的解釈が主体となっている。「孝を以て君に事ふるときは則ち忠なり」の項では、歴史的事例として中国春秋時代、伍子胥が父兄の仇である楚の平王の死体をむち打ったという「死屍に鞭うつ」の故事を紹介している。(谷口)

さんこうこうじつ ず  
16『三綱行実図』 3冊  
(朝鮮) 倣循著



1434年、朝鮮の倣循<sup>せつじゆん</sup>が王命により、韓国と中国の書籍から君臣・父子・夫婦の三綱に模範となる行いを集めて編纂した教訓書。1428年、普州に住む金禾<sup>きむ う</sup>が父を殺害した事件に対して厳罰しようとする主張<sup>しやう</sup>に対して、当時の王であった世宗<sup>せじゆん</sup>が、世に孝行の風習を周知させる目的で刊行された。展示箇所「江革巨孝<sup>かうかくきやう</sup>」は、後漢の官僚である江革の逸話。江革は幼い時に父を亡くし、大乱に遭遇した際、年老いた母を背負って難を避けて逃げた。しかし、食べ物を探取し、母を養っている間に、敵軍に出くわした。このとき、捕まると母親の世話ができなくなると恐れ、涙ながらに懇願したところ、その真心に敵も感動して命を助けてくれた。これにより、村では彼を孝子として称賛し、江巨孝と呼ぶようになったという。(金)

さんりやく ひしやう  
17『三略秘鈔』 3巻1冊  
清原宣賢著  
寛永4(1627)年刊



中国の兵書『三略』の3巻(上略・中略・下略)を、清原宣賢が「三略講義」と「三略直解」(明・劉寅注)を利用して、注釈と講義に使った解説書。この本の原典である「三略」はもともと偽書と考えられており、中国の代表的な兵書7種を指す武経七書の中でも中核をなす。ここに挿入された挿絵は『三略秘鈔』の後半部、すなわち「下略」に現れた内容であり、ここには道徳や国家安寧などが記述されている。老子の「已むを得ずしてこれを用ふ」と孟子の「易姓革命論」が登場するが、これは『三略』が既存の兵法書とは異なり、統治原則、天道、賢者、義戦などに大きな関心を注いでいるためと考えられる。このような理由で、清原宣賢は、『三略』に基づいて本書を執筆し、これを講義に積極的に活用した。(金)

じょくんこうきょう  
18『女訓孝経』 1冊

八隅山人述

東都〔江戸〕：岡田屋嘉七ほか 文政5(1822)年序



唐代において女性のための教訓書として編まれた『女孝経』の和刻本。『女孝経』は、唐代の侯莫陳邈<sup>こうぼくちんぱく</sup>の妻である鄭氏<sup>てい</sup>によって著された。鄭氏は、永王李璘<sup>りりん</sup>の妃となった姪のためにこの書を編んだとされる。全18章からなり、孝の思想を表した儒教経典『孝経』の体裁に倣っている。日本では、寛政3(1791)年12月に、江戸の嵩山房小林新兵衛より刊行された。王妃としての振る舞いを記した「后妃章第二」では、現代でも通用しそうな女性リーダーとしての在り方が説かれる。展示箇所「事舅姑章第六」では、実の父母に対するのと同じ敬愛をもって舅姑につかえることが書かれている。例えば、嫁いだら、実家とは距離をおき、舅姑を実の父母よりも大事にすることなど。現代社会では、とても通用しそうにない。(水野)

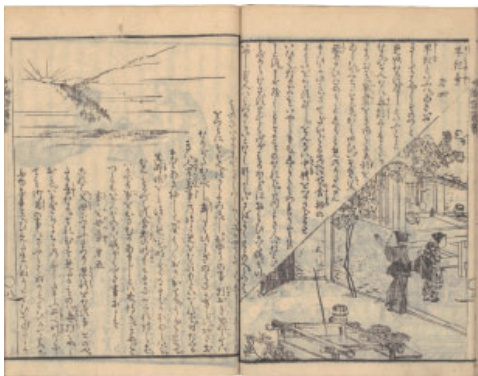
そうたい こ おんなろん ご ず え  
19『曹大家女論語図会』 1冊

伏原宣明編

大坂：敦賀屋喜蔵ほか

江戸：須原屋茂兵衛ほか

天保6(1835)年刊



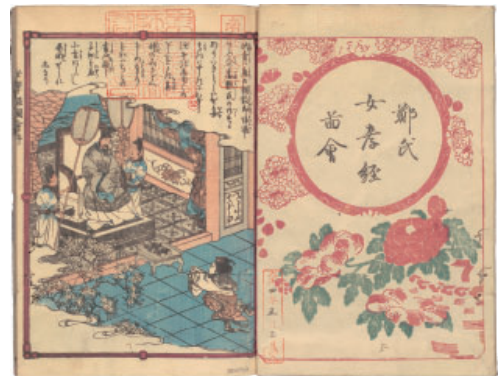
てい し おんなこうきょう ず え  
20『鄭氏女孝経図会』 1冊

伏原宣明編

大坂：敦賀屋喜蔵ほか

江戸：須原屋茂兵衛ほか

天保6(1835)年刊



曹大家<sup>そうたい こ</sup>とは、中国後漢の学者である班昭<sup>はんしやう</sup>のこと。時の皇帝の命により宮中で皇后や貴人たちの教育に従事した。人々は崇敬の念を込めて曹大家と称した。本書は、その曹大家が著したとされる「女論語」の図絵。全12章からなる。序文によれば、『論語』に擬え、女性の教育のために記されたとある。展示箇所は、「早起章第四」。例えば、早朝、鶏が鳴く頃に起きて衣服を整えること、日が高くなるまで寝てはならないことなどが説かれている。興味深いのは、これらに反した行動は、地域の人々に見られ、家族に恥をかかせることとあることである。個人の規範が家族の名誉に還ってくる。

資料20は、図入りの『女孝経』の和刻版。『女訓孝経』(資料18)より、鮮やかに制作され、見た目にも美しい。読者を楽しませ、読者を増やそうとする意図を感じ取ることができる。(水野)

# 朝鮮の大学者李退溪の生活と芸術 — 隠逸的生活に籠る儒教的士 の精神

李退溪 (1501-1570) は、16 世紀の朝鮮王朝社会で主導的な地位を築いていた士林勢力の理論的基盤を構築した、朝鮮儒教史における重要な人物である。彼の卓越した学問的業績と高潔な人格は、知識人の模範となり、後世の学者たちから「東方の朱子」と称えられるほどに崇められた。特に李退溪の学問は、後に日本にも伝わり、藤原惺窩や林羅山などによって継承され発展した。このような彼の影響力は現在も続いており、韓国の 1000 ウォン紙幣にも彼の肖像が描かれている。

李退溪が生きた 16 世紀の朝鮮中期は、王位の交代に伴う権力争いと士禍によって多くの人命が失われた非常に混乱した時期であった。このような時代背景の中で、現実を直視し学者としての良心を守りながら生き続けた李退溪は、40 歳を過ぎた後、故郷の安東に戻り隠居生活を送ることを決意した。しかし、彼の名声があまにも高かったため、朝鮮朝廷から何度も召喚され、官職に就いては辞職を繰り返した。ついに 57 歳になった年に帰郷し、隠遁生活を送ることができるようになった。このような彼の心情は、似たような境遇を経験した陶淵明の「飲酒」詩二十首に対する次韻詩の 19 番目 (「和陶集飲酒 二十首・其十九」) に、次のように表れている。

小少聞聖訓、学優乃登仕。偶為名所累、輾転徒失己。龍鍾猶強顔、竊独為深恥。高踏非吾事、居然在郷里。所願善人多、是乃天地紀。四時調玉燭、萬物各止止。畢志林壑中、吾君如怙恃。

小少より聖訓を聞く、学優にして乃ち登仕す。偶たま名の累わす所と為る、輾転して徒らに己を失う。  
龍鍾たれども猶お強顔、竊かに独りに為に深く恥ず。高踏は吾が事にあらず、居然として郷里にあり。  
願う所は善人多きことを、これ乃ち天地の紀。四時玉燭調う、萬物各おの止止たり。志を林壑中に  
畢くさんとするも、吾が君は怙恃のごとし。

この詩の背景には、陶淵明の「飲酒」に込められた乱世における知識人の苦悩が含まれている。陶淵明もまた、若い頃に仕えようとした東晋が滅び、宋の混乱の中で官職に就けない状況にあった。彼は現実を避けて田園に退き、一杯の酒を楽しむことで不条理を忘れ、隠者としての生活を送ったのである。李退溪も同様に、自身の現実を陶淵明の詩に重ね合わせ、上記の詩を作成した。

しかし、ここには陶淵明の原詩と比較して注目すべき違いがある。例えば、「(朝廷に) 善良な人が多くなることを願う」「万物がそれぞれの場所にとどまることを願う」「我が君主を親のように信頼できる」といった表現である。

李退溪は、乱世から避けて隠居したいという思いがありながらも、「善良な人」や「国の君主」について考えており、依然として社会に対する関心を持っていることがわかる。このように、李退溪の隠遁は、俗世を完全に忘れて去る道家的性向の陶淵明とは異なる形を呈している。これは儒教的な進退観と深い関係



(図1) 聖学十図 朝鮮, 1741年, 紙・その他, 34.9 x 22.9cm, 34.7 x 22.3cm, 韓国国立中央博物館

があり、孔子の「天下に道がある社会では義を行い、道に通じ、天下に道がない社会では隠して自分の志を求める」という教えに起因する。これを証明するように、李退溪は故郷に退いて隠居していた最中にも、当時の王に「戊辰六条疏」(1568年)という上訴を上げ、同年に『聖学十図』という図説を作って伝えている。特に『聖学十図』は、儒教哲学に基づいて「聖王」や「聖人」になるための10の徳目を図説で示した帝王学的な書物である(図1)。

李退溪は、このように絶え間ない修養を通じて人格完成を目指しただけでなく、自分の悟りを社会に適用しようと強く努力したのである。ところが、このような儒教的価値を実現するためには、他人を治める前に、まず自分自身を正しく磨く修己の過程が厳しく求められる。したがって、李退溪の思想には、心の学問に起因する修己の側面が強調されている部分がある。彼が一生をかけて磨き上げたこのような人生の価値は、晩年に陶山書堂が完成した後、弟子たちを教えながらさらに光を放った。李退溪は、芸術も修身の一過程と考え、書堂周辺の草の一毛、石ころの一つにも名前を付け、それぞれに詩を書いて意味を与えた(図2)。このような彼の芸術精神は、60歳の時に書堂を完成させた際に詠んだ「陶山書堂」の詩によく表れている。

大舜親陶樂且安、淵明躬稼亦歛顔。聖賢心事吾何得、白首歸來試考槃。

大舜親しく陶たり 樂且つ安、淵明躬稼から稼えて亦た歛顔。聖賢の心事 吾何ぞ得ん、白首にして歸來し考槃を試みん。

伝統的に儒教の文人たちは、経書を通じた学問だけでなく、詩・書・画などの芸術活動を通じて修養を実践しており、その中で李退溪は主に詩に集中していた。このような彼の芸術観は、この詩に顕著に表れている。ここでは、隠居しながらも楽しさを失わなかった舜と陶淵明が冒頭に登場する。そして、李退溪自身も晩年に故郷に戻り、隠逸的な生活を送ることへの感謝と喜びを表現している。特に、詩の最後の部分で『詩経』の「考槃」篇を引用して楽しさを説明していることから、より高次元の意味が含まれていることが分かる。

つまり李退溪が強調した喜びの感性は、孔子が『論語』で言及した「孔顔樂処」の境地、すなわち儒教的次元の楽しさ(知之者、不如好之者、好之者、不如樂之者)を意味する。したがって、李退溪が俗世を背いて自然に退いたという意味は、単に景色を楽しむだけではない。彼はこれを証明するために、当時の大学者だった奇大升との7年間(1559-1566)の討論「四端七情論弁」を経て、自分だけの理論的基盤を構築した。彼は絶え間ない学習と修養を通じて聖賢の正しい気運を理解し、四端から発現された純粋な感性を体得しようと努力した。したがって、李退溪の詩には、儒教的真理を磨き、人格を完成しようと不断に努力した彼の学問的境地と人柄が、芸術の形で現れている。

急速な発展と物質万能主義による過度な商業化が進む現代社会において、李退溪のように正しい人格形成を目指して生涯を捧げた真の士々の精神は、今こそ再び見直されるべき価値であろう。(金)



(図2) 退尤二先生真蹟帖, 朝鮮, 1746年, 紙・水墨 25.3 x 39.8cm 宝 585号, リウム美術館

にじゅうしこうみたてえあわせ  
21『二十四孝見立画合』

楊洲周延画

東京：長谷川常治郎 明治23(1890)年刊



7 王祥

明治期に活躍した浮世絵師の楊洲周延(1838-1912)が手掛けた連作「二十四孝見立画合」のうち、7番目の王祥<sup>おうしょう</sup>の話。画面上部には、二十四孝の説話が描かれている。王祥は厳寒の冬に生魚を食べたいと言う継母のため、氷結した河の上に裸になって横たわり、魚を獲ろうとした。氷が少し溶け、2匹の魚が跳ね出てきたため、持ち帰り、継母に食べさせた。王祥は、毒殺されそうになるほど、継母に嫌われていたが、生涯にわたり恭しく継母に仕えたのであった。画面下部は、見立ての図。傘を右手に持ち、河を眺める女性が描かれている。その視線の先には、獵師と飛び跳ねる1匹の鯉がある。女性の視線は、どこか冷ややかである。おそらく、意地悪な継母を模したのであろう。華やか衣装をまとう女性たち、冷たい冬の河で漁をする獵師の描写が対比的である。(水野)



10 剡子

連作「二十四孝見立画合」のうち、10番目の剡子<sup>せんし</sup>の話。剡子は年老いた両親の眼病に効くとされる鹿の乳を求め、鹿の毛皮を身にまとい群れに紛れた。獵師が剡子を鹿と間違えて射ようとしたところ、獵師は彼の孝行に感心し、鹿の乳を与えたという。この話が、画面上部に描かれている。画面下部は、その見立て。室内には艶やかな着物を着た女性と、やや驚いた表情の童子が描かれている。童子は毛皮の衣を被って隠れようとしているようだ。机の下には、文鎮や筆が散乱している。おそらく勉強をしていないところが見つかったため、慌てたのであろう。(水野)

にじゅうしししょうこうこうろくしゅう  
22『二十四孝行録抄』 1冊

洛陽[京]：婦屋仁兵衛 寛文5(1665)年刊



本書は二十四孝に関する注釈書である。序文では、24名の孝行者について章ごとに詳述されており、著者は不明だが、これが人々によって手書きで伝えられてきたことが説明されている。また、『孝経』の一節を引き、仁・義・礼・智の重要性についても言及されている。展示箇所は、二十四孝の剡子。剡子は迦夷国の人であることが書かれ、鹿乳は眼病の薬であることなど、説話の詳細が記されている。(水野)

## 第3部 地方の孝子伝

藤井<sup>ふじ いらんさい</sup>懶齋(1628-1709)『本朝孝子伝』(資料23)が貞享2(1685)年に出版され翌年改版本出版、さらに翌4年には『仮名本朝孝子伝』(資料24)が出版された。その流行に倣うように井原西鶴『本朝二十不孝』も出版されることとなった。その背景としてあったのはやはり五代將軍<sup>とくがわつなよし</sup>徳川綱吉による孝行奨励政策の推進であろう。画期としては天和2(1682)年、諸国に命じて、忠孝を励まし、不忠不孝の輩は重罪に処すべき旨の高札(忠孝札)を建てさせたことがある。

綱吉がこの政策を推進するに至った契機としては、すでに先進的に幾人かの藩主が孝子表彰の政策を取っていたことにある。正保・万治期(1644-1661)に、会津藩主保科正之<sup>ほ しなまさゆき</sup>が先導し、岡山藩主<sup>いけだ みつまさ</sup>池田光政もこれに続いて、領民に対して孝子表彰を行った。『会津孝子伝』(資料28)には表彰された孝子の伝が記載されている。次いで寛文年間(1661-1673)には福知山藩から肥前島原藩に移った松平忠房<sup>まつだいらただふさ</sup>(1619-1700)もこの政策に追随して、国史館儒者であった林鷺峰に漢文伝作成を依頼したりもしている。これらの各地域の孝子伝のいくばくかは『本朝孝子伝』今世部の素材となっている。綱吉を頂点とする孝子表彰政策は、はるか古代律令制国家における孝道奨励政策をなぞった気配がある。律令制の統治原理は儒教の徳治政治であり、その人倫の根本は孝の精神に拠るものである。17世紀の幕藩政治のなかで儒教の徳治政治がどれほどの効力を発揮するものか大いに疑問ではあるが、統治者が武から文にシフトしようと意志したとき、その精神的根拠として再び孝が召喚されたのである。

以上の中央からあるいは統治者からの孝子発掘の流れは、次第に地方に浸透してゆくこととなる。長崎奉行の孝子表彰について、西川<sup>にしかわ</sup>如見<sup>じょけん</sup>(1648-1724)『長崎夜話草』(資料26)が、福岡藩での孝子表彰について、藩儒<sup>たけだ</sup>竹田定直<sup>さだなお</sup>(1661-1745)によって『筑前国宗像郡武丸村正助伝』(資料27)がそれぞれ刊行された。

しかしながらこれら孝子伝中の人物の行動はふつうには過度なものである。とくに中国の「二十四孝」については常識を超える話柄となっている。いみじくも『本朝二十不孝』(我が身を焦がす釜が淵)で、「鏝<sup>こがね</sup>の釜の掘り出し、今の世にはなかりき」というように、現実世界では起こりえないことがらと捉えられていた。ただこのような孝子譚の奇矯さには説話としての吸引力があったのである。行動の規範にはならなくとも孝のもつ含意性はじゅうぶんに伝わったものと考えられる。

(谷口)

## 23『<sup>ほんちようこうしでん</sup>本朝孝子伝』 3巻3冊

伊蒿子著；狩野永敬図

西村孫右衛門 貞享3(1686)年刊



京都の儒者、藤井懶斎<sup>いこうし</sup>(伊蒿子)が日本の孝子を選んで記した漢文体伝記。天和4(1684)年懶斎自序、<sup>なかむらてきさい</sup>中村惕斎(1629-1702)跋、貞享2年初版、翌3年再版。本書は貞享3年新題簽本。巻上には天子4、公卿16、巻中には士庶20、巻下には婦女11、今世20の人物を選び、伝を記した後、それぞれに賛・論を加えている。歴史上の人物については典拠を示し、現今の人物は確かな伝聞に基づくもの、自分の目撃した人物に限定している。各伝には京狩野家4代目の永敬による挿画がある。平重盛が父清盛に忠義によって諫言したことで結果的に父への孝となったこと(公卿4)、丹後国土師村の蘆田為助の両親への厚い孝心を時の福知山藩主松平忠房が顕彰し、林鷲峰に伝記を書かせたこと(今世13)などが記されている。(谷口)

## 24『<sup>かなほんちようこうしでん</sup>仮名本朝孝子伝』 3巻3冊

京：日野屋半兵衛 宝永5(1708)年刊



『本朝孝子伝』(資料23)を漢字平仮名交じり文に翻訳したもの。貞享4(1687)年初版。本書は宝永5年版本。訳者は未著録だが、『本朝孝子伝』刊行後の意見などに対応していることや藤井懶斎は仮名書きの著作を匿名で出版していたことなどから、懶斎自身の翻訳とみられる。序はまったく新たに書かれ、前著にあった凡例は削除、新たに「書題」として神代の孝子を追記する。本文は基本的に前著によりつつ平易に翻訳を行い、賛は削除し、論は直訳せず意を取った簡潔な和文としている。総じて序にいう「よみ見ん人の心に心をつたへむ事」を旨とした編集となっている。挿画は原図を踏襲している。巻末に前著刊行以降に知り得た3名の伝を追加している。(谷口)

ほんちようにじゅうしこう  
25『本朝二十四孝』 3巻1冊

鳥井庄兵衛画

松倉宇兵衛 元禄10(1697)年刊



『仮名本朝孝子伝』(資料24)から「二十四孝」に合わせて24話を選び出したもの。ほぼ『仮名本朝孝子伝』の記述を踏襲するが、論については節略して本文に合体している。序跋などはなく、編者として懶斎の関与は認められない。原書からの引用は、天子4/4、公卿5/16、士庶4/20、婦女1/11、今世10/20と偏りがある。刊記脇に「絵師鳥井庄兵衛」とあり、鳥居派の祖、清信(1664-1729)の画とする。挿画の構図は原書にほぼよっており、細部の意匠を加えるところがある。後三条天皇が皇太子のときに、自身の即位を思うことが、兄帝の後冷泉天皇の退位を意味することから、自らその不忠不孝を戒めて北斗を拝したという。(谷口)

ながさきや わ そう  
26『長崎夜話草』 5巻1冊

西川正休編輯

京：茨城多左衛門 享保5(1720)年序



長崎の天文学者である西川如見の口述を子の正休が筆記した説話集。異国船の渡来事情や事件、長崎の風俗、孝子説話、眼鏡細工や象嵌などの長崎の特産品や土産物が解説されている。18世紀前半における長崎の事情を知る上で重要な史料。全5巻。巻4に、孝子や貞婦、列女など、15名があげられている。展示箇所は、寛文の頃(1661-1673)、長崎本紺屋町(現在の長崎市栄町・賑町)に住む忠夫の浦川七左衛門の話。浦川七左衛門は幼少時に奉公し、後に成功して母を引き取った。かつて仕えた主人の家は没落したが、この元主人を助け、亡き後も17年間墓参りを続けた。これを聞いた長崎奉行の河野通定(1620-1692)は彼を称賛し、銀10枚を授け、諏訪社の修理役と町の長役に任命し、ますます家が繁栄したのであった。(水野)

ちくぜんのくにむなかたぐんたけまるむらしょうすけでん  
**27『筑前国宗像郡武丸村正助伝』 1冊**

竹田定直誌

江戸：小川彦九郎 京都：茨城多左衛門 享保15(1730)年刊

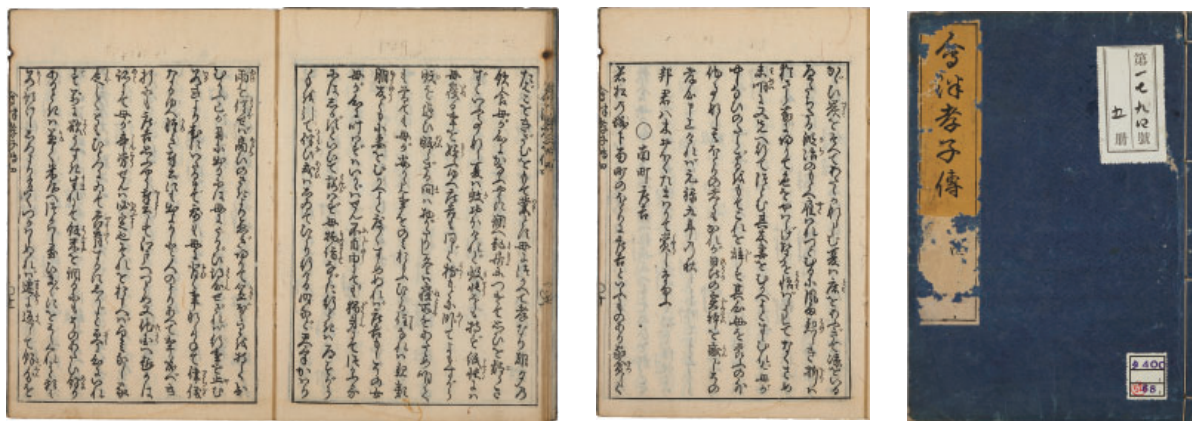


孝子説話でも最も有名な「宗像郡武丸村正助」についてまとめられたもの。福岡藩の儒学者である竹田定直(春庵)によって編まれた。筑前国(現在の福岡県北西部)武丸村の正助(1671-1757)は、親孝行によって宗像郡でだけでなく、福岡藩や幕府にまで称賛された。農民ながら「武丸」姓が与えられた。正助の孝行話には多くのものがあるが、例えば、年老いて歯が弱くなった両親の前では、両親に気を遣い、硬いものを食べなかったなど。いずれも両親の心に寄せたエピソードで溢れる。現在も地元の宗像市では顕彰され、「正助ふるさと村」という公園がある。(水野)

あいず こうしでん  
**28『会津孝子伝』 5巻5冊**

森雪翁

京：梅村弥右衛門；茨城多左衛門 寛保2(1742)年刊



会津藩(現在の福島県会津地方)の孝子説話をまとめたもの。隠者の森雪翁<sup>もりせつおう</sup>によって著され、江戸在住の儒学者の三輪執斎(1669-1744)によって序が附された。奥付の枠外に『筑前国孝子良民伝』(資料29)の広告がある。雪翁の叙によると『本朝孝子伝』(資料23)に触発されたという。展示箇所は、現在の会津若松市南町に住む「庄吉」の孝行話。母のため、寝所にて夏は蚊を追ひ払い、眠れないのであれば物語を話し聞かせ、冬は寝所を体で温めた。しかも、結婚すると母を蔑ろにしそうなため、独身を貫いたとのこと。55歳の時に母が亡くなると、魚や鳥を家に入れず供養に努めた。藩主の松平正容<sup>まさかた</sup>(1669-1731)は、独身であることに苦言を呈しつつ(家を存続させることも孝の一つ)、褒め称えた。他の孝子伝を見るに、独身で母に尽くした男は意外と多い。(水野)

ちくぜんのくにこうしりょうみんでん  
29『筑前国孝子良民伝』 後編上下巻(中巻欠)2冊

竹田定直手書；和田一伝画

京：茨城多左衛門 江戸：小川彦九郎 寛保3(1743)年刊



福岡藩の儒学者である竹田定直によって編まれた筑前国の孝子説話集。展示箇所は、鍛冶町(現、福岡市中央区天神3丁目)に住んでいた常五郎の話。常五郎の父の惣兵衛は、元文2(1737)年の春に姫嶋へ島流しされてしまった。このとき、子である常五郎は15歳の幼い少年であったが、悲しみ、家業に精励し、母を養い続けた。常五郎は、遠流された父に仕送りを欠かさず、飲食や衣服など生活に不自由がないようにした。両親に尽くす姿が自然と国主に知られ、幼少ながらもその親孝行な姿勢が評価され、元文5(1740)年の春に父の遠流が許されたのであった。(水野)

ひごこうしでん  
30『肥後孝子伝』 後編 3巻3冊

中村正尊著

天明6(1786)年序



肥後国に伝わる孝子伝。熊本藩士の中村正尊<sup>まさたか</sup>によって編まれた。寛政元(1789)年、幕府は全国に向けて善行者表彰の事例の提出を命じた。本書は、これに応える形で発行されたものと考えられる。全編にふりがなが施され、藩主の表彰によって領民を風教する意図があったようだ。展示箇所は、河原村(現在の阿蘇郡高森町河原)に住む新七の話。幼くして父を亡くした新七は、母とともに伯父の家に身を寄せた。成長するにつれて母に仕えた。やがて、父の家を買い戻し、農業に励んだ結果、家は次第に栄えた。母のために清潔な一間を設け、安らかに過ごせるようにした。どんなに忙しい日でも、必ず母の安否を確認してから仕事に取りかかったと書かれている。(水野)

### 31『芸備孝義伝』 9冊

頼惟完(春水)著

京師〔京〕：北村庄助 芸州〔広島〕：柏原屋平七 享和2(1802)年刊



広島藩の儒学者である頼春水<sup>らいしゅんすい</sup>(1746-1816)・杏坪<sup>きやうへい</sup>(1756-1834)兄弟らが、藩内で親孝行などの善行を行った者の伝記を集成したもの。享和元(1801)年に初編が出版された後、続編が相次いで出版され、その数は全35冊に及んだ。830人以上の藩内の孝行者が紹介されている。傘張りや綿打ちなど、19世紀初頭における庶民の生活を生き生きと描かれているところに本書の特徴がある。なお、『日本外史』(資料40)の著者である頼山陽(1781-1832)は、この春水の長男。(水野)

### 32『近世孝子伝』 1冊

城井寿章著；佐藤元蓑校

東京：松崎半蔵(発兌) 明治8(1875)年刊



明治8(1875)年に教科書として編まれた近世の孝子伝のアンソロジー。序文は、京都所司代を務めた稲葉まさくに<sup>あおきとうえん</sup>正邦(1834-1898)や書家の青木東園(?-1909)らによる。青木の序文によれば、明治初期には子どもの教育のために外国から書籍が導入されていた。しかし、彼はそれよりも日本の歴史書や物語を使った教育の重要性を訴えている。展示箇所は、伊勢鈴鹿峠の萬吉の話。萬吉は、父市右エ門が旅人の荷物を運ぶ途中で亡くなった後、母久米とともに生計を立てるために働いた。彼の孝行が幕臣の石川忠房の目に留まり、支援を受けた。孝行が評判となり、12歳で江戸に召され、銀子と扶持を賜った。後に信楽代官に足輕として雇われ、苗字を与えられた。85歳で没し、孝行の模範として顕彰碑が建てられた。(水野)

## コラム

## 「孝子伝」と日本の文学

「孝子伝」は中国儒教社会において『孝経』とともに童蒙の書として読み継がれてきた。『孝経』が抽象度の高い理念を表出する経書であるの対して、「孝子伝」はその具体の相を人物の行動において記したもので、漢代の孝子画像資料が伝存している。成書としては前漢劉向仮託の『孝子伝』が最初というが、実際は六朝期の作である。その後10種以上の後続書が現れた。それらは中国では宋代には亡佚し、清代に諸書より蒐集復元されたが、日本には中世期の完本写本2本が伝存しており(陽明文庫本、船橋家旧蔵本)、内容は六朝期末まで遡りうると考えられる。両書には帝舜に始まる孝子45条が伝えられている。

「孝子伝」は奈良時代には日本に将来されていた。養老賦役令「孝子・順孫」条は、孝子・順孫・義夫・節婦の顕彰を各国郡に呼びかけたものである。その「孝子・順孫」に対して『令集解』所引「古記」に「孝子伝」から原谷の伝が引用されている。令本文には「孝子・順孫」とあるのみだが、その内実を「古記」は「孝子伝」を引いて具体的に説明するのである。「古記」は天平10(738)年ころ成立の、「大宝令」の注釈で、その「孝子伝」が現伝する陽明文庫本と同系の本文であることは、それ以前に陽明文庫本系の一本が日本に伝来していた証となるのである。12世紀院政期の『今昔物語集』巻9は震旦部で、「孝養」の主題を持つ説話が類聚されている。「震旦の郭巨、老母に孝にして黄金の釜を得たる語第一」、「震旦の孟宗、老母に孝にして冬の筍を得たる語第二」などは「孝子伝」類からの引用であろうが、注目すべきは同話が仏教の唱導資料にも重なって見えることで、仏教的言説に孝子譚が取り込まれることとなった。

中国において「孝子伝」の亡佚に取って替わって盛行するのが、「二十四孝」を基とした「二十四孝」である。原型は唐末あたりに形成されていたようだが、現伝する最古の書物は、元の郭居敬撰『全相二十四孝詩選』(14世紀中ごろ)である。24名について各話とも4字句の標題(「為母埋児」、「哭竹生筍」など)、孝子名、説話、五言絶句で構成されており、「全相」とあるように各話に図が添えられている。日本には南北朝時代に五山禅僧によって取り入れられ、室町時代末期までに御伽草子『二十四孝』として翻案された。享保年間(1716-1736)の渋川版では、各話とも孝子名、五言絶句、説話、挿画で構成されている。本学蔵本『古板二十四孝』(口580-228、刊年不明)は、各半葉に1名を収め、上部に挿画を入れ込んでいる。古代における「孝子伝」の場合はいまだ機会的、断片的な受容であったが、中近世の「二十四孝」では御伽草子としてより全円的広がりをもって受容されてゆくこととなった。

「二十四孝」の流行に触発されて、貞享2年に『本朝孝子伝』(資料23)、貞享4年に『仮名本朝孝子伝』(資料24)が相次いで藤井懶斎によって著された。懶斎著の成功の流れに倣うように貞享3年に井原西鶴『本朝二十不孝』が版行される。「二十不孝」は「二十四孝」のもじりであることは自明であるが、その序に「雪中の筍八百屋にあり、鯉魚は魚屋の生船にあり。世に天性の外祈らずとも、夫々の家業をなし、禄を以て万物を調へ、孝を尽くせる人、常也」と、二十四孝中の孟宗と王祥とを引き合いに出し、超自然的な力による孝を否定し、現実的で平凡な人間の営みによって孝は実践しようと宣言する。西鶴は『本朝孝子伝』今世部の20条の陰画として20人の不孝者を造形したが、孝子伝中の人物がいずれも度を過ぎた行動をとるのに応じるように、極端なまでの不孝を体現する。誇張された不孝を描くことで当世の人の心を活写しえたのである。

ただこの孝に対する視点は西鶴独自のものであって、一般には「二十四孝」の浸透は根深いものであった。明和3(1766)年初演の近松半二らの合作による浄瑠璃『本朝廿四孝』では、長尾武田両家抗争のなかで、三段目において老母に対する孝行として、孟宗の故事を素直に踏まえた展開をみせるのである。このように身に染みついた孝観念があってこそ西鶴の試みが生かされたのであろう。

(谷口)

## 第4部 江戸時代の教育 藩校と寺子屋

江戸時代の日本は、封建制度が確立され、全国に数多くの藩が存在していた。その中で、藩士の教育機関として「藩校」、庶民の子供たちが学ぶ場である「寺子屋」が発展したのである。これらの教育機関は、それぞれ異なる役割と目的を持ちながらも、江戸時代の教育制度を形成し、日本の文化と社会に大きな影響を与えた。

藩校は、各藩によって設立された学校であり、主に武士の子弟を対象としていた。藩校の目的は、藩士の子供たちに武士としての教養と能力を身につけさせ、藩の行政や軍事に貢献できる人材を育成することであった。藩校では、儒学(特に朱子学)が中心に教えられ、忠孝の精神や倫理観が重視された。代表的な藩校には、水戸藩の「弘道館」や長州藩の「明倫館」、熊本の「時習館」があり、これらの学校は高い教育水準を誇り、他藩のモデルともなっていた。

一方、寺子屋は、庶民の子供たちを対象とした教育機関であり、地域社会に密着した形で運営されていた。主に寺院や個人の家で開かれ、子供たちは読み書きや算術を学んだ。寺子屋の教師は僧侶や地方の知識人、商人などが務め、教育内容は日常生活に直結する実用的なものであった。その中で教科書として使用されたのが、「往来物」である。往来とは本来手紙のやりとりを意味し、往来物とは、その手紙を束ねた模範例文集である。平安時代には成立し、単語集や短文集等、手紙の形式を離れたものも作成された。寺子屋では、日常生活に必要な知識や作法を身に付けることを目的として編纂され、各地域の文化、習慣に即した内容となっている。このように寺子屋は庶民にとって重要な教育の場であり、農民、商人、職人など、幅広い階層の子供たちが通った。寺子屋の普及により、識字率が向上し、庶民の知識水準が全体的に高まったとされている。江戸時代末期には、全国に数千校もの寺子屋が存在していたと言われる。

江戸時代の教育制度は、藩校と寺子屋という二つの主要な機関を通じて、多くの人々に知識を提供した。藩校は武士の子弟に高い教養を与え、寺子屋は庶民の子供たちに実用的な教育を施した。これにより、江戸時代の日本は識字率の向上や社会の知識水準の向上を実現し、その後の日本の発展に大きな影響を与えたのである。(水野)

### 33『古今武士鑑』 5巻5冊

難波(棕梨)一雪著

大坂：浅野弥兵衛 京都：浅野久兵衛 元禄9(1696)年刊



その名のとおり、日本における武士のあるべき姿を綴ったもの。別称、『日本武士鑑』。俳諧師の<sup>むくなしいつせつ</sup>棕梨一雪(1631-1709頃)によって著された。序文に、文と武、孝と忠を併せ持つことが説かれており、それぞれの励みとなる敵討話と孝子伝記を記したと刊行目的が記される。展示箇所は、「曾我兄弟の仇討ち」の説話。<sup>く</sup>建久4(1193)年の5月28日に起こった。兄の曾我十郎祐成と弟の五郎時致は、父の河津三郎の敵である工藤祐経を、富士野の狩小屋で夜討ちし、兄弟は、見事に祐経を討ったのであった。その折りに兄の祐成は討死し、即日<sup>どうすけつね</sup>に時致は捕らえられ、翌日に梟首された。この曾我兄弟の話は、遅くとも13世紀後半には『曾我物語』という軍記物として成立し、広く流布したため、武士の鑑として読まれた。(水野)

### 34『庭訓往来』1冊

中野道也 寛永12(1635)年刊

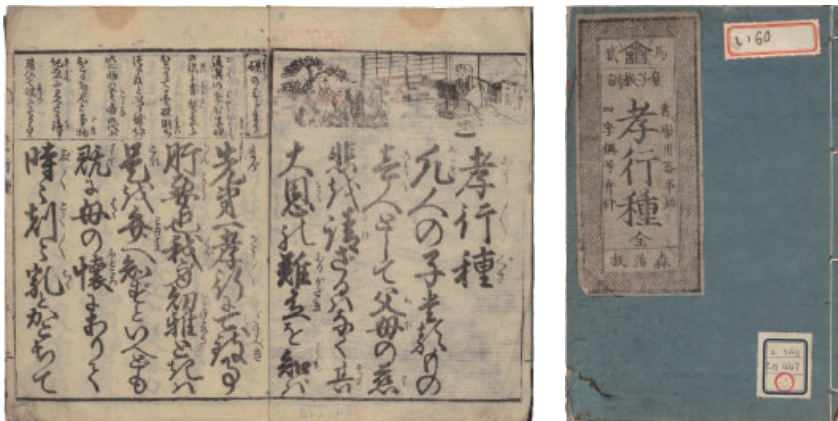


南北朝時代、14世紀中ごろに作られた往来物の一種。作者は不詳であるが、中層階級の武家が想定される。1年12ヵ月分に各月往復2通ずつと「八月十三日状」1通との計25通から構成されている。各月の内容はさまざま、新年の会(正月)、詩歌の宴会(2月)、地方大名の館造(3月)、領国の繁栄(4月)などで、武家社会での教養の様子が窺える。たんなる手紙の範型というよりも、各状中間にある<sup>とくほん</sup>類別単語集に特徴があり、知っておくべき語を羅列してある。室町期の古写本が40種以上存在し、寛永5(1628)年版を始めとして江戸時代以降、習字用、読本用、絵入本、注釈本など200版近く出版されて、寺子屋などで教科書として繁用されていたことが分かる。本書は比較的古い寛永12(1635)年版で、「寛永乙亥夏五吉旦中野氏道也刊行」の刊記を持つ。4月往状には領主の統治を仁徳天皇の領民を思う善政に準えて、領地が繁栄するさまを述べている。(谷口)

### 35『孝行種』 1冊

東里山人(鼻山人)著

江戸：森屋治兵衛 文政7(1824)年刊



本学乙竹文庫蔵本は、寺子屋等で庶民教育に使用された、父母の恩恵に報いる孝行についての往来文集。人の子たるものは誰一人、父母の慈悲を受けない者はなく、その大いなる恩がありがたいことを知れば、何より、孝行をなすことが肝心であるとする。人は天に擬えられる父、地に擬えられる母から命を賜わり、それは「天地の道理」に由来することなどが述べられる。(井川)

### 36『前賢故実』 10巻20冊

菊池武保(容斎)輯著；手塚光照ほか校



幕末から明治期の絵師である菊池容斎(きくちようさい)(1788-1878)によって編まれた伝記集。上古から南北朝時代までの皇族、忠臣、烈婦など585人が肖像画として描かれ、漢文で略伝を附されている。明治期の多くの日本画家が本作から様々な歴史画を制作しており、美術史上、重要な資料として注目される。容斎は、本作を作成するにあたり、古画を学習している。例えば、今日、著名な神護寺の「伝源頼朝像」を見て頼朝を描き、また松平定信編纂『集古十種』(資料37)からの引用も認められる。このような武士イメージが、武士像の典型となり、忠孝の象徴として流布したものと考えられる。展示箇所は、頼朝の弟の義経。『集古十種』の引用によって制作された。(水野)

37『<sup>しゅう こ じっしゅ</sup>集古十種〈古画〉肖像』4 1冊（84冊のうち）  
松平定信編

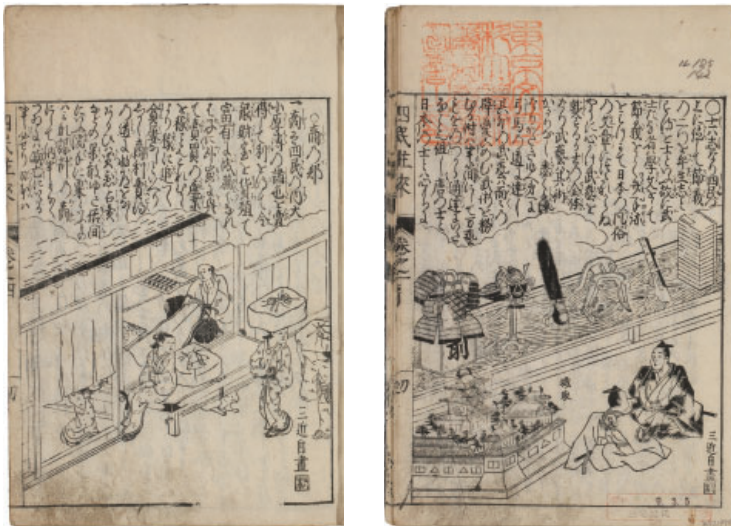


松平定信によって編纂された古宝物の図録。十種類に分類して収集したことから、「集古十種」と命名された。古宝物の新造の手引き、また散逸を恐れ記録するために定信が私財を投じて制作した。柴野栗山や谷文晁など、当時の名だたる文化人によって編纂され、現在の国宝などが含まれており、当時の文化史を考える上で貴重な資料となっている。展示箇所は、頼朝の弟の義経。今日の義経イメージの典型となる中尊寺所蔵の「源義経像」の写しである。文様の数が足りず、簡略的に写されていることが理解できるが、衣文線の肥瘦、重ね書きされた箇所などが詳細に写されている。（水野）

38『<sup>し みんおうらい</sup>四民往来』4巻5冊

綱錦斎中村三近子筆作

大坂：植村藤三郎 皇都〔京都〕：植村藤右衛門 江戸：植村藤三郎 享保20(1735)年刊



筆者は、儒学者の中村<sup>さん きん し</sup>三近子(1671-1741)。士農工商の職制などが記されている。庶民は、本書のような往来物によって武士の基本的な役割を学んでいた。巻頭に「士は志なり。四民の上に位して節義の二つを平生志とするを士といふ故に武士たる者ハ学文をして節義をよく弁え手跡をはげみて(略)」とあるように、武士は民の見本となるように忠孝や節義を持つことが説かれている。庶民から見れば、忠孝のあるべき姿とは、武士の姿ということになろう。「商の部」では、勤勉や正直であること、儉約に努めることが説かれている。絵は筆者の中村三近子による。やや首を前に突き出したポーズをとり、とぼけた表情が特徴的である。

(水野)

39『<sup>いまようみたて し のうこうしょう</sup>今様見立土農工商 <sup>しょうにん</sup>商人』 3枚

歌川豊国画

安政4(1857)年刊



土農工商の「商人」が、美人と見立てられ、女性のみで描かれている。絵師は、歌川国貞(三代目・豊国)。江戸の下谷新黒門町上野広小路にあった絵草紙問屋「<sup>うおえい</sup>魚栄」の店頭風景が描かれている。書物や錦絵が売られ、暖簾には大きく「東錦絵」と染め抜かれており、江戸の名物として錦絵が人気を博していたことがわかる。魚栄は歌川広重の『名所江戸百景』を手がけていたことでも知られ、左端にその広告が載る。(水野)

40『<sup>にほんがいにし</sup>日本外史』 卷之1 1冊 (12冊のうち)

頼久太郎(山陽)著

元治元(1864)年跋



源平二氏から徳川氏に至る武家の歴史書。漢文体。文政10(1827)年には脱稿、山陽没後の天保7(1836)、8(1837)年ころ出版された。本書は元治元年刊の「上方小本」に基づき、中国広東で光緒元(1875)年に翻刻されたもの。司馬遷『史記』の「<sup>せいか</sup>世家」を範とした。その体裁は、武家の棟梁となった家(源氏・新田氏・足利氏・徳川氏)を「正記」とし、前後に有力な諸氏を「前記」あるいは「後記」として配列する。記の前後には論賛が加えられている。平易かつ格調の高い漢文体で劇的に展開する叙述が人気を博した。『平家物語』巻2の<sup>ししがたに</sup>鹿ヶ谷事件に関わる平重盛の父清盛に対する長大で事理を言分けた諫言を、漢文体で要を絞りこみ、なかでも人口に膾炙する「忠ならんと欲すれば則ち孝ならず。孝ならんと欲すれば則ち忠ならず。重盛の進退これに<sup>きわま</sup>窮る」と忠・孝を対極的価値とした惹句に翻訳している。(谷口)

## コラム

## 和魂漢才の神—天神と孔子

藩校や寺子屋では、『論語』を代表とする四書五経の素読と習字を中心として、儒教経典が使用された。寺子屋では、いわゆる「読み書き算盤」のような習字や算数、『庭訓往来』を使用した書簡の作成法の取得など、実生活に基づいた知識も修得できた。そのような教育現場では、日本の精神を学ぶ実生活の知識と中国の学問を融合した「和魂漢才」ともいえるような思想が醸成されたと言える。その象徴として藩校や寺子屋で祀られたのが、「天神」と「孔子」である。

天神、すなわち菅原道真は、日本の平安時代の学者であり、政治家でもある。彼はその優れた学識と正直な人格から、「学問の神様」として崇拝されている。道真は、政治的な迫害により失脚し、死後に神格化された。寺子屋で使用された机は「天神机」と呼ばれた。天神にあやかって、その名が付けられたとされるが、定かではない。

道真の命日である2月25日に学問の向上を願う「天神講」という行事がおこなわれ、天神の肖像が祀られた。例えば、元文5(1740)年には河内国道明寺の天満宮にて周辺の寺子屋の生徒が参詣し、崇拝したことが知られている。

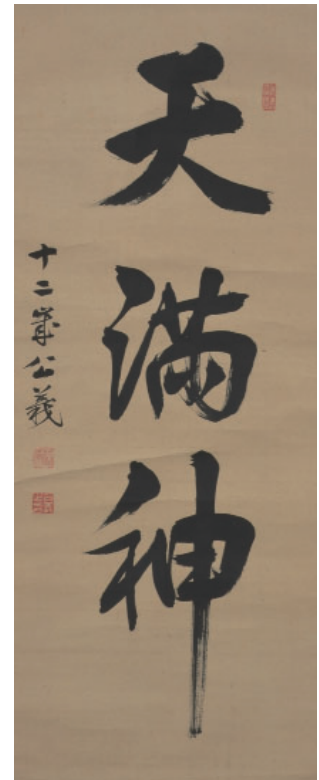
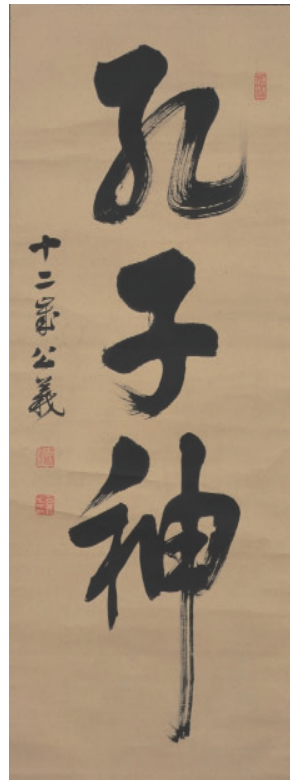
孔子は、古代中国の思想家であり、儒教の創始者である。儒教は、知識の追求だけでなく、人間としての道徳的な成長も重視していた。日本では、古代から受け入れられ、特に近世では、武士階級を中心に広まった。藩校に孔子像が掲げられる理由は、孔子の教えが学問だけでなく、品格や道徳の重要性を強調しているためと考えられる。これにより、知識を学ぶだけでなく、人間としての成長を目指すことが奨励されたのであろう。

江戸時代の藩校では、孔子像が祀られていた。例えば、福岡の修猷館では、天明4(1784)年の開講式にて狩野典信筆「孔子像」が祀られた。これは福岡県立修猷館高等学校に現存し、現在も同校の入学式にて掲げられている。

ところで、江戸時代において天神と孔子の両者が一緒に掛けられた例は見つけない。ただ、明治3(1870)年開校の京都の小学校では、画像のような「天満神」と「孔子神」と書かれた軸が掛けられ、崇拝された。書は、公家の姉小路公義(1859-1905)による。このような事例から、江戸時代の学校でも、両者が掲げられた可能性があるかもしれない。

このように天神と孔子は、「和魂漢才」の象徴であり、学校においては教育を支える存在であったのである。

(水野)



二学神「孔子神」「天満神」

姉小路公義筆 京都市学校歴史博物館蔵

# 参考文献一覧

## はじめに 東アジアのモラリティ

- ・守隨憲治校註『日本古典全書 近松半二集』朝日新聞社 1949年
- ・今井宇三郎・瀬谷義彦・尾藤正英校註『日本思想大系53 水戸学』岩波書店 1973年
- ・早川光三郎『新釈漢文大系58・59 蒙求上・下』明治書院 1973年
- ・大島建彦校註・訳『日本古典文学全集36 御伽草子集』小学館 1974年
- ・杉本秀太郎『文学演技』筑摩書房 1977年
- ・松田元『祇園祭細見：山鉦篇』郷土行事の会 1977年
- ・本間洋一編著『本朝蒙求の基礎的研究』和泉書院 2006年
- ・河内将芳『絵画史料が語る祇園祭：戦国期祇園祭礼の様相』淡交社 2015年

## 第1部 帝王学—『貞観政要』と『帝鑑図説』

- ・Isidore-Stanislas HELMAN, *Faits mémorables des empereurs de la Chine, tirés des annales chinoises*, Paris, l'auteur et M. Ponce, 1788.
- ・原田種成『新釈漢文大系95・96 貞観政要上・下』明治書院 1978・1979年
- ・北野良枝「狩野一溪著『後素集』の校訂」『鹿島美術財団年報』15 1997年
- ・山崎誠「後素集とその研究(上)」『国文学研究資料館文献資料部調査研究報告』18 1997年
- ・小助川元太「『後素集』の『帝鑑図説』利用—狩野一溪の画題理解に関する一考察」『国語国文』78 (6) 2009年
- ・入口敦志『武家権力と文学：柳営連歌、『帝鑑図説』』ぺりかん社 2013年
- ・野田麻美「狩野山楽筆「帝鑑図押絵貼屏風」(東京国立博物館)の研究」『国華』118(9) 2013年
- ・竹村則行『『孔子聖蹟図』和版集成』花書院 2014年
- ・勝又基『親孝行の江戸文化』笠間書院 2017年
- ・石見清裕(訳注)『講談社学術文庫2642 貞観政要 全訳注』講談社 2021年
- ・水野裕史編『アジア遊学271 儒教思想と絵画・東アジアの勸戒画』勉誠出版 2022年
- ・許永晝『寛政の聖蹟図：『孔子行状図解』と文人藝術の創生』文人画研究会 2023年

## 第2部『孝経』と東アジア孝子伝

- ・François Noël. tr., *Hiao Kim, in Sinensis imperii libri classici sex*, Praga, 1711
- ・Pierre-Martial Cibot, trad., *Hiao King: Livre canonique sur la Piété Filiale, in Mémoires concernant les Chinois*, vol. 4, 1779
- ・坂本良太郎「我が国に於ける孝経古鈔本の系統」『文化』7-9 1940年
- ・林秀一『中国古典新書 孝経』明德出版社 1979年
- ・寛久美子「中国の女訓と日本の女訓」女性史総合研究会編『日本女性史』第3巻 東京大学出版会 1982年
- ・山崎純一『教育からみた中国女性史資料の研究：『女四書』と『新婦譜』三部書』明治書院 1986年

- ・栗原圭介『新釈漢文大系35 孝経』明治書院 1986年
- ・井川義次「ヨーロッパ人による「孝」の解釈」『漢意(からごころ)とは何か：大久保隆郎教授退官記念論集』東方書店 2001年
- ・加地伸行『講談社学術文庫1824 孝経 全訳注』講談社 2007年
- ・井川義次『宋学の西遷：近代啓蒙への道』人文書院 2009年
- ・大久保範子「筑波大学所蔵楊州周延画《二十四孝見立画合》第十号〈刺子〉について」『『礼拝空間における儒教美術の総合的研究』論文集』筑波大学日本美術史研究室 2012年
- ・横井清訳『講談社学術文庫2140 新井白石「読史余論」現代語訳』講談社 2012年
- ・塩谷温・諸橋轍次・宇野哲人『孝経・大学・中庸新釈』致知出版社 2015
- ・宇野瑞木『孝の風景：説話表象文化論序説』勉誠出版 2016年
- ・野間文史『孝経：唐玄宗御注の本文訳 附孔安国伝』明德出版社 2020年
- ・勝又基『中公新書2671 親孝行の日本史：道徳と政治の1400年』中央公論新社 2021年
- ・潘鳳娟『孝道西遊 孝経翻訳と欧州漢学の源起』聯経出版 2022年
- ・末永高康訳注『岩波文庫青211-1 孝経・曾子』岩波書店 2024年
- ・藤田覚『武人儒学者新井白石：正徳の治の実態』吉川弘文館 2024年

## 第3部 地方の孝子伝

- ・小島憲之『萬葉以前：上代びとの表現』岩波書店 1986年
- ・佐竹昭広『絵入本朝二十不孝』岩波書店 1990年
- ・黒田彰『孝子伝の研究』佛教大学通信教育部 2001年
- ・幼学の会編『孝子伝注解』汲古書院 2003年
- ・東野治之『日本古代史料学』岩波書店 2005年
- ・勝又基編『『本朝孝子伝』本文集成』明星大学 2010年
- ・ファンステーンパール・ニールス「近世中期在村における「孝子顕彰」の社会的基盤：「由緒」としての「孝子」」『日本教育史研究』31 2012年
- ・菅野則子編『肥後孝子伝』汲古書院 2019年
- ・菅野則子編『近世の孝子伝・孝義伝：『会津孝子伝』・『石見国宇野村孝子伝』・『若州良民伝』・『筑前国孝子良民伝』』汲古書院 2021年
- ・柳沢昌紀ほか編『仮名草子集成66』東京堂出版 2021年

## 第4部 江戸時代の教育 藩校と寺子屋

- ・石川松太郎校註『東洋文庫242 庭訓往来』平凡社 1973年
- ・頼成一・頼惟勤訳『日本外史 上・中・下』岩波書店 1976-1981年
- ・『集古十種：あるく・うつす・あつめる 松平定信の古文化財(おたから)調査』福島県立博物館 2000年
- ・塩谷純「歴史画のつくりかた—菊池容斎の『前賢故実』」『IS：Panoramic magazine：Intellect & sensitivity』85 2001年
- ・『京都市学校歴史博物館常設展示解説図録』京都市生涯学習振興財団 2009年
- ・中野慎之「前賢故実の史的位位置」『Museum』664 2016年

# 掲載資料一覧

| 資料番号 | 資料名                       | 請求記号          |
|------|---------------------------|---------------|
| 1    | 標題徐状元補注蒙求 10 巻 10 冊       | イ 290-7       |
| 2    | 本朝蒙求 3 巻 3 冊              | タ 480-65      |
| 3    | 弘道館記述義 2 冊                | ホ 200-115     |
| 4    | 貞観政要 10 巻 10 冊            | ヨ 630-29/ 貴   |
| 5    | 貞観政要諺解 10 巻 5 冊           | ヨ 630-13      |
| 6    | 帝鑑図説 12 巻 12 冊            | ロ 580-783     |
| 7    | 帝鑑図説 6 巻 6 冊              | ヨ 600-56      |
| 8    | 帝鑑図                       | 個人蔵           |
| 9    | 本朝画史                      | カ 200-16      |
| 10   | 後素集 3 巻 2 冊               | カ 200-80      |
| 11   | 新刊聖蹟図 1 冊                 | タ 700-6       |
| 12   | 続本朝人鑑 2 巻 2 冊             | タ 480-2       |
| 13   | 読史余論 12 巻 12 冊            | ヨ 380-449     |
| 14   | 古文孝経 1 冊                  | 123.7-Ko14/ 貴 |
| 15   | 孝経国字解 3 巻 1 冊             | ロ 850-76      |
| 16   | 三綱行実図 3 冊                 | タ 760-4       |
| 17   | 三略秘鈔 3 巻 1 冊              | ロ 890-33      |
| 18   | 女訓孝経 1 冊                  | 159.6-Ta26    |
| 19   | 曹大家女論語図会 1 冊              | ロ 580-38      |
| 20   | 鄭氏女孝経図会 1 冊               | ロ 580-38      |
| *21  | 二十四孝見立面合 7 王祥・10 剡子 2 枚   | 721.8-H38     |
| 22   | 二十四章孝行録抄 1 冊              | タ 700-114     |
| 23   | 本朝孝子伝 3 巻 3 冊             | タ 400-269,270 |
| 24   | 仮名本朝孝子伝 3 巻 3 冊           | タ 400-67      |
| 25   | 本朝二十四孝 3 巻 1 冊            | ロ 580-789     |
| 26   | 長崎夜話草 5 巻 1 冊             | ヨ 360-53      |
| 27   | 筑前国宗像郡武丸村正助伝 1 冊          | ロ 580-881     |
| 28   | 会津孝子伝 5 巻 5 冊             | タ 400-68      |
| 29   | 筑前国孝子良民伝 後編上下巻（中巻欠） 2 冊   | タ 400-70      |
| 30   | 肥後孝子伝 後編 3 巻 3 冊          | タ 400-69      |
| 31   | 芸備孝義伝 9 冊                 | タ 400-212     |
| 32   | 近世孝子伝 1 冊                 | タ 400-76      |
| 33   | 古今武士鑑 5 巻 5 冊             | タ 480-91      |
| 34   | 庭訓往来 1 冊                  | ル 185-413     |
| 35   | 孝行種 1 冊                   | ル 185-447     |
| 36   | 前賢故実 10 巻 20 冊            | タ 430-56      |
| 37   | 集古十種 古画 肖像 4 1 冊（84 冊のうち） | ヨ 900-52      |
| 38   | 四民往来 4 巻 5 冊              | ル 185-142     |
| 39   | 今様見立土農工商 商人 3 枚           | 721.8-U96     |
| 40   | 日本外史 巻之 1 1 冊（12 冊のうち）    | ヨ 380-292     |

※附属図書館の貴重図書は、請求記号の末尾に「 / 貴」と示した

※資料21については、7王祥(中央図書館)・10 剡子(図書館情報学図書館)で所蔵している。

## 企画

筑波大学芸術系  
筑波大学附属図書館研究開発室  
水野 裕史 (准教授)

筑波大学人文社会系  
井川 義次 (教授)

筑波大学名誉教授  
谷口 孝介

筑波大学附属図書館  
西尾 チヅル(館長)  
山口 恵里子(副館長・研究開発室長)  
斎藤 未夏 (学術情報部長)

附属図書館特別展ワーキング・グループ  
真中 孝行 (主査)  
大石 桎洋  
大久保 明美  
中尾 拓夢  
廣田 直美  
福井 恵  
又吉 うめ乃  
吉田 芙弓

## 電子展示Web

<https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/2024>

---

令和6年度 筑波大学附属図書館特別展

忠孝一本－江戸時代のモラリティ－

令和6年10月29日発行

発行 筑波大学附属図書館 ©2024

〒305-8577 茨城県つくば市天王台1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷 前田印刷株式会社

ISBN 978-4-910114-52-1



筑波大学

*University of Tsukuba*